

# 長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について

前島 美保

筆者は平成二十八年（二〇一六）秋、長唄唄方の阪東亀寿が所持していたとされる史料一括を古書店より手に入れた。この史料六十一点からは、阪東亀寿が歌舞伎の番付等に記載されずほとんど他史料からは浮かび上がってこない人物にもかかわらず、黒御簾の豊富な芝居唄のレパートリーを有し、時には明治後期大阪長唄の名手阪東小三郎のワキを勤め、上方舞の地方としても活躍していたこと等が知られる。

本稿は、この阪東亀寿旧蔵史料全体の概要と各史料の詳細を『近代歌舞伎年表』等と照らし合わせながら紹介し、史料から窺われる阪東亀寿なる人物の事績と、そこからわずかに垣間見える近代上方劇界・音曲界を素描することを目的とする。また近代上方の囃子方旧蔵コレクションの中で、本史料がどのような位置づけにあるかについても併せて検討してみたい。

〔キーワード〕 近代上方歌舞伎 囃子方 黒御簾音楽 芝居唄 地歌 上方端歌 上方舞 音楽演出

はじめに

近代上方歌舞伎に阪東亀寿という長唄の唄方がいたらしい。「らしい」と書いたのは、これまでその活動時期や来歴がほとんど知られていない囃子方だからである。大正十年（一九二一）五月二日初日、松島八千代座の長唄唄方連名に、玉村伊太郎、玉村富二、坂東卯之助に続いてその名が見られるのを今のところ唯一とする<sup>①</sup>。

平成二十八年（二〇一六）秋、縁あってこの阪東亀寿が所持していたとされる史料一括を古書店より手に入れた。目録に「長唄唄方阪東亀寿旧蔵唄本類 一括」とあったそれである（【図版1】）。この史料群からは、阪東亀寿が番付等に記載されない囃子方であったにもかかわらず、時には「明治後期の大阪に於ける長唄謡ひの名手」<sup>②</sup>と称された阪東小三郎（一八四六～一九〇七）のワキを勤めるなどの実力の持ち主であったことなどがわかって

くる。本稿は、阪東亀寿旧蔵史料全体の概要と史料の詳細を『近代歌舞伎年表』等と照らし合わせながら紹介し、史料から窺われる阪東亀寿なる人物の事績と、そこからわずかに垣間見える近代上方劇界・音曲界を素描することを目的とする。

なお、近代上方の囃子方旧蔵コレクションには、ほかにも初代中井猪三郎、小川弥三郎、杵屋富造、中村美秋、杵屋胡金吾等のものが知られる。非公開を前提とする史料の性格上、近代上方歌舞伎音楽の伝承や演出についてはなお不明な点が多い中にある、本史料がこうしたコレクションの中でどのような位置づけにあるかについても併せて検討したい。

## 一、史料の概要

本史料は全六十一点から成る（後掲【表1】）。すべて唄本である。独特の



【図版1】「丘山堂古書目録」より（一部転載）



【図版2】署名（上段左より「大津画所作事」「忠臣蔵七段返し所作事」「供やつこ」「娘道成寺」）

筆跡から、いくつかの例外を除き、基本的にすべて本人による自筆本と考えられる<sup>③</sup>。署名には「阪」と「坂」の二種の表記が見られるが（【図版2】）、これらを年代や機会によって使い分けていた様子は今のところ見受けられない（本稿では暫定的に「阪東」で統一する）。

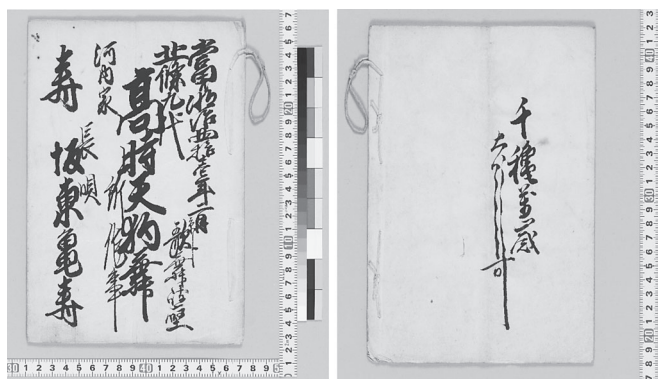
全六十一点は形態上、大きく二つに分けられる。一つは半紙本を仮綴じした薄物の唄本五十五点、もう一つは小型の枕本六点である。唄本、枕本の順に特徴を考察してゆきたい。

## （一）薄物唄本（五十五点）の詳細

薄物の唄本五十五点は、興行で用いられたと考えられるものと、それと特定されないものがある。その線引きは必ずしもはっきりしないが、前者、

すなわち興行時に所作事（舞踊）で用いられたものと思しき唄本の表紙には、年月日、座、外題、「寿」、署名、裏表紙に「千秋万歳大々叶」等と書かれてあるものが多い（図版3）。計二十九点ある（表1—仮番号1—29）。このうち十九点に紙縫り紐の輪がついている（図版3）。あるいは束ねてまとめて保管していたか、何かに提げていたのだろうか。いずれにせよ、この紐の輪が興行時の唄本を特徴づけている標となっている。これらの唄本は縦半分に折りたたんだ痕跡も見受けられ、概して使用感がある。この二十九点を上演年代順に並べると、明治三十六年（一九〇三）三月角座の「妹背山道行」（お三輪）より大正九年（一九二〇）十二月松島八千代座「夕ぎり所作」まで十七年に及ぶ。比較的短い期間ではあるが、この頃の上方劇界は初代市川右團次、初代中村鴈治郎が大芝居の中心をはる一方、新劇や活動写真等の台頭が著しい時代であり、社会に目を向けると大阪天王寺にて第五回内国勸業博覧会が開催された時期から日清・日露戦争を経ていわゆる大正時代までという、上方における近代化の時期と重なる。

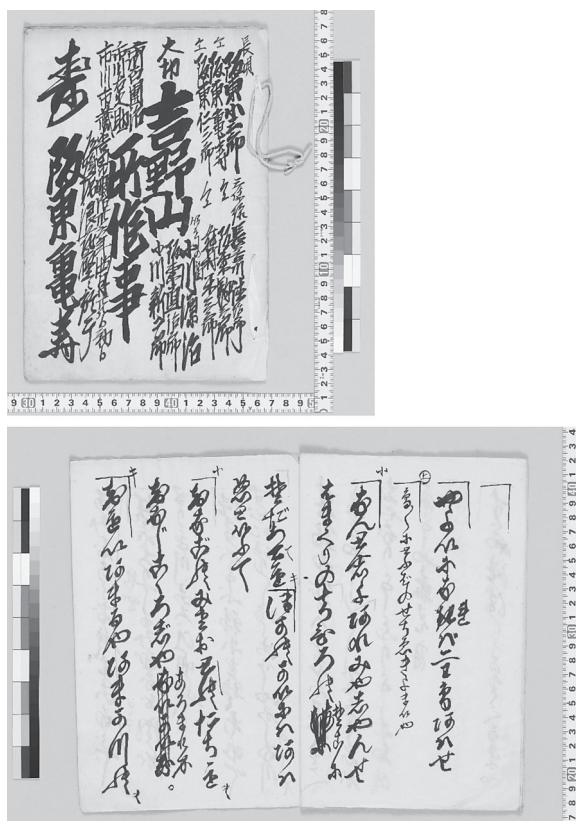
いくつか唄本を取り上げながら特徴を見ておきたい。【表1—2】の「吉野山所作事」（同計略花吉野山）は、明治三十六年四月二十九日から五月二十八日まで浪花座で大切に上演されたもので（図版4）、初代市川右團次が楠正行、市川右之助（二代目市川右團次）が塚本狐、市川市蔵が弁の内侍と



【図版3】「高時天狗舞所作事」唄本表紙、裏表紙

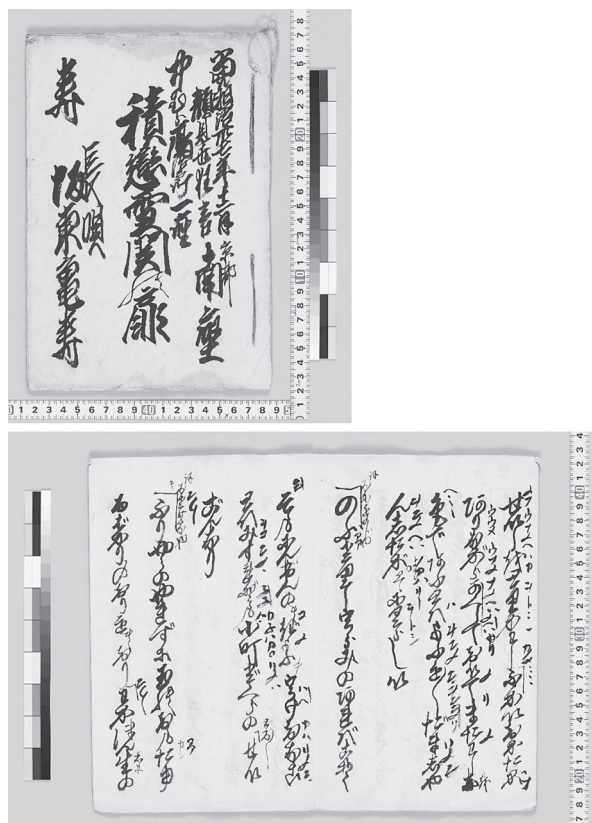
千枝狐を演じた。この時の長唄連名は番付等では確認できず、当該唄本で初めて明らかになるのだが、タテ唄阪東小三郎のワキで阪東亀寿が出ていたことが知られる。本文の注記を見ると、「小」「キ」と唄い分けが記されており、「小」はすなわち阪東小三郎、「キ」は阪東亀寿の唄い場ということがわかる（図版4）。阪東亀寿の読みは「キジュ」であったのだろう。へなんとしよ」以下の内侍のクドキを小三郎と亀寿で分け合っていたようだ。ここに見られる「④」は浄瑠璃の意で、本曲は竹本（義太夫節）と長唄の掛合で行われたことも判明する。<sup>④</sup>

唄本の「小」の書き込みが阪東小三郎の唄い場であると仮定すると、この他にも明治三十六年三月「妹背山道行」【表1—1】、明治三十八年（一九〇五）十一月「門けいせい所作事」【表1—11】に認められる。小三郎は明治四十年（一九〇七）十二月七日に行年六十二で亡くなっているから、その晩年の舞台活動を奇しくも亀寿の唄本から覗き見ることが可能である。



【図版4】「吉野山所作事」唄本表紙、本文





【図版 5】「積恋雪関の扉」唄本表紙、本文

【表1—3】の「積恋雪関の扉」は、明治三十七年（一九〇四）十二月二日より南座にて初代中村鴈治郎の墨染、二代目中村玉七の関兵衛、中村成太郎（後の魁車）の小町姫によって演じられたもので、番付に「竹本連中 長唄はやし連中」とあって、常磐津節ではなく竹本と長唄の掛けで出された。当該唄本を見ると「①」の書き込みが散見される（図版5）。抜き差しはあるものの、常磐津節の「関の扉」をよくなぞっており、カン（甲）の書き込み位置も一致している。亀寿は「不慮の矢疵に」以下のカンを受け持っていることが確認される。

このように、唄本からは長唄以外の伝承曲に亀寿が出演している例が多く見られ、常磐津節では「積恋雪関の扉」のほかに「油とりうつほ猿」【表1—13】、「忠臣蔵八段目道行所作事」【表1—17】など多数あり、また清元節では「みちとせ道行 忍逢春雪解」【表1—22】も唄っている。こうした演

奏習慣は、近世後期以来の上方特有の現象として、これまで以下のように説明されてきた（傍線部筆者）。

京阪は前期に引続き義太夫節が「チヨボ」以外に所作事地としても盛に用ゐられて、甚だ流行した宮古路諸流、殊に宮蘭は本期の初にはその景事、道行等を大成したが、本期中頃に至つて景事、道行が漸次衰退すると共に宮蘭も廃れ、遂に宮古路諸流は劇場附の囃子方の兼業となつた。更に前期末より本期中頃にかけて江戸長唄、常磐津、富本、清元、新内等が移植されたが、これ等何れも、囃子方によつて兼業された。でその名目もすべて「ぶんご」又は「江戸唄」の名称の許に総括された。その結果、「双面」と「助六」とが同一仁により「戻駕廓大全」や「鳥羽絵」が義太夫節の語り手により演じられるといふ変態的な現象さへ生ずるに至つた。このまゝ、明治に及んだ為に、近頃まで大阪の囃子方といへば、一人で各種を兼ねる悪い慣例の種子が蒔かれる因となつたのである。<sup>(6)</sup>

亀寿の唄本はこの言を如実に伝える。しかしこうした場合であっても、亀寿自身、唄本表紙に「長唄」と署名しており<sup>(7)</sup>、あくまで本人は長唄方だと主張しているのは興味深い（図版5）。この点は後に検討する。

興行時に用いられた唄本は、市川右團次一座や中村鴈治郎一座などの大芝居の舞台のものが多く、中には女役者の地方を勤めた時のものもある。「鶴亀引拔紀尾井獅々」【表1—21】は、大正二年（一九一三）六月二十一日大阪九条第二芦辺倶楽部にて上演された女芝居岩井琴女一座の唄本である（図版6）。第二芦辺倶楽部は九条歌舞伎座を改称したもので、当時活動写真や女芝居（所作事）に使われていた。岩井琴女は女團十郎と称された市川九女八（一八四五前後—一九一三）の門弟で、師弟共演による女芝居を頻繁にこの芦辺倶楽部で出している。<sup>(8)</sup> その岩井琴女の「鶴亀引拔紀尾井獅々」の

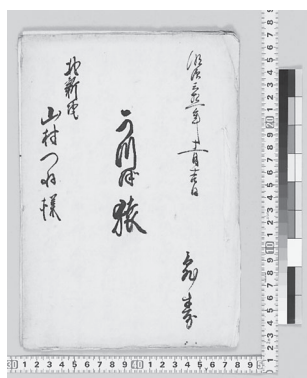
地方を阪東亀寿が勤めていたことになる。<sup>(9)</sup>

以上に対して、興行時と特定されない唄本が【表1—30—55】で、計二十六点ある。舞踊会やお濠い等が想定されるが、唄本自体に情報量が少なく、十分に上演時を考証することができない。その中で【表1—54】の明治三十一年（一八九八）十一月「うつば猿」の唄本が、ひとまず亀寿旧蔵史料の上限を示す史料として注目される（【図版7】）。表紙に「山村つね様」とあるが、この山村つねは初世山村舞扇斎の養女山村れんの門弟にあたる人物と推測される。<sup>(10)</sup> 興行時と特定されない唄本は、使用機会が少なかったためか、保存状態の良いものが多い（【図版8】）。これらの唄本を概観した場合にも、長唄以外の音曲のものが比較的多く見られるという特徴は、前述の興行時の唄本と同様である。「子持山姥」「山姥」「ましら猿」「乗合万歳」「積恋雪関扉」「将門」「お光狂乱」「玉うさぎ」「清元権八」「千本道行」など竹本、常磐津節、清元節の伝承曲の唄本が、「勧進帳」「末広がり」「供やつこ」「娘道成寺」等の長唄唄本と一緒に存在しているのである。否、長唄のものは唄本全体の中で五分の程度しかなく、圧倒的に少ない。

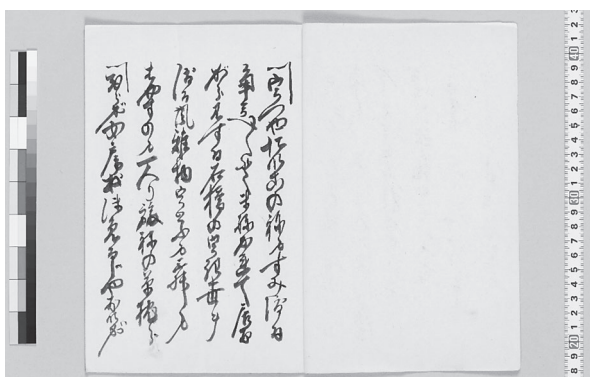
実は、この一見不可思議な唄本の在り方にこそ、阪東亀寿の立ち位置が知れるのではないだろうか。つまり、唄本に自ら「長唄」と署名しながら、長唄唄本の現存数が少なく、番付等の出囃子連名に記載されることがほとんどなく、それでも時に阪東小三郎のワキを勤めるなど重要な唄い場を任され、竹本、常磐津節、清元節の伝承曲も担当せざるを得なかった事情である。すなわち、亀寿は黒御簾の唄方が専業



【図版6】「鶴亀引拔紀尾井獅々」表紙



【図版7】「うつば猿」表紙



【図版8】「越後じょ」

だったのではなかったかということである。  
ここまで考えが及んだ時、亀寿旧蔵史料のもう一つの史料群、枕本の存在が大きな意味を持つてくる。続いて枕本六点について検討する。

## （二）枕本（六点）の詳細

分厚い横本の形状の枕本は六冊ある（【図版9】、【表1—56—61】）。いずれも目次が付されており、その後に各曲の歌詞が列挙されている。六冊のうち、内容から主に芝居で用いられたと考えられるもの（『雑用集哥日力恵劇場用』『所作日賀恵』『地哥端哥日力恵』）と、主に舞地として用いられたと考えられるもの（『吾妻しらべ』『糸のしらべ』『舞地調』）とに大別される。



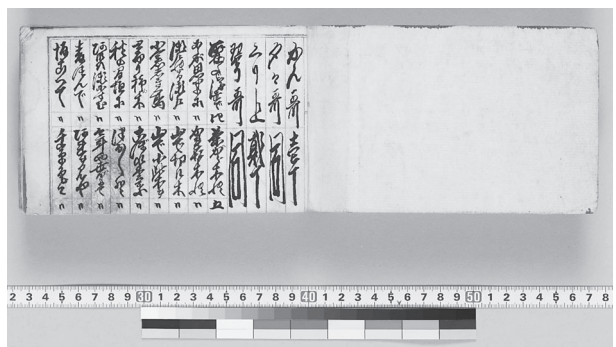
『雑用集哥日力恵 劇場用』

『雑用集哥日力恵』（雑用集歌控）は、主に黒御簾の使い物の唄の歌詞が収載された枕本である。【後掲表2】には各曲の唄い出しをリスト化したのが、全二〇〇丁、のべ七二七曲を数え、収載曲が極めて多いことがまず特徴として挙げられる。目次に続き、詞章が列挙されるが、調子や口三味線、三味線の手付の記載はほとんど見られない（【図版10、図版11】）。歌詞集の様相である。

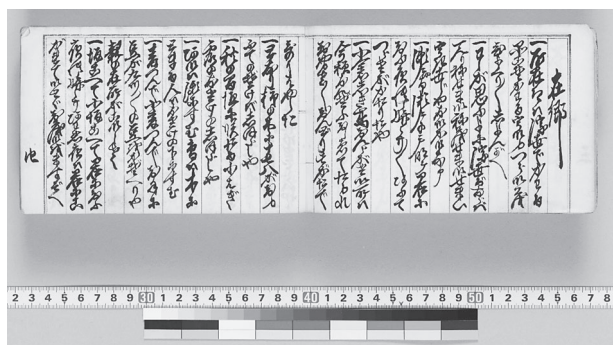
分類法が興味深い。「かん哥」（甲唄）・「タ々哥」（只唄）二十三曲に始まり、「くり上」六曲、「琴哥」九曲、「在郷」・「早ざいご」（早在郷）五十一曲、「茶屋場哥」十曲、「ちらし」七曲、「神楽大拍子」十七曲と続く。以上は使用場面ごとに分類がされており、「かん哥」から「琴哥」までは主に時代物の御殿などで用いられる唄、「在郷」以下は主に世話物で使用される唄



【図版9】枕本（六点）



【図版10】『雑用集哥日力恵』目次



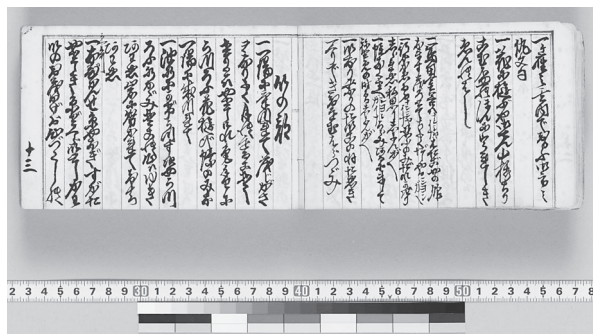
【図版11】『雑用集哥日力恵』本文（在郷）

である。花街ものは「茶屋場哥」、寺や神社に使われるものは「神楽大拍子」とやや独特の分類用語もあり、ここに杵屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』上方編（以下『上方編』<sup>(1)</sup>）とも異なる、明治大正期頃の上方の芝居唄の体系化を見ることができるといえる。以上に続いて、『雑用集哥日力恵』は唄い出しのいろは順に四三五曲を並べる（【図版12】）。その後、「二上り新内」「追分」「そり」「シギン」「ウタイ」等の曲が整理され、最後に決まり物と地歌や上方端歌、長唄、端唄、俗曲等の一六八曲が並ぶ。適宜替歌の例も記されるなど、非常に実用性の高い手控えとなっている。

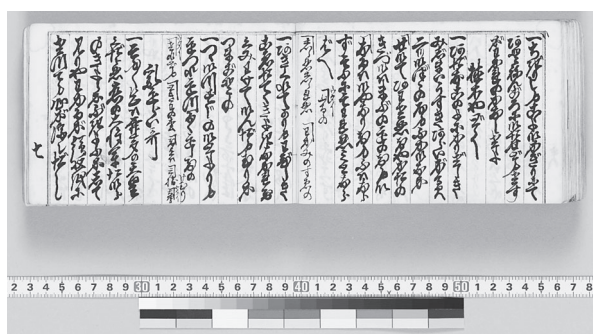
一つ二つ例を見てみよう。決まり物に挙がる「植木やどく」は、忠臣蔵外伝『忠臣連理廻鉢植』（『植木屋』）の独吟で、上方歌舞伎ゆかりの演目と知られる。初代中村鴈治郎が中村宗十郎の代役で演じた名をあげた出世作で、鴈治郎はこの植木屋弥七（実ハ千崎弥五郎）を度々演じている。『雑用集哥日

カ恵』には『植木屋』の独吟として三曲が見える（【図版13】）。

ちぎり



【図版12】『雑用集哥日カ恵』本文（いの部）



【図版13】『雑用集哥日カ恵』本文（植木やどく）

これと『日本戯曲全集』第十五巻の台本（上演年不詳）を照合してみると、『雑用集哥日カ恵』の独吟の歌詞は断片的で異同もあるが、内容はほぼ同じとわかる。<sup>(12)</sup> また、謡や「常磐の松」（隣座敷から聴こえてくる余所事）の段取りもこの台本通りである。『雑用集哥日カ恵』には黒御簾の唄方に必要な情報が集約されていることがわかる。ただし、基本的に芝居におけるキッカケ等については記されていない。

また、「箕輪心中」（岡本綺堂作）で用いられたとする「君と寝やるか」という曲は、『歌舞伎音楽集成』江戸編（以下『江戸編』）によれば明治四十四年（一九一）九月東京明治座で初演された時、田圃の太夫の四代目沢村源之助がこの曲を覚えており、昭和四十年（一九六五）六月に東京歌舞伎座で三代目市川寿海が再演するにあたり、大阪の杵屋富造（一九〇二〜七七）から「昔から大阪にあった曲だ」として教えてもらい復活したということと知られる。<sup>(14)</sup> この「君と寝やるか」と同一曲が、『雑用集哥日カ恵』「きの部」に「君とねよふか」として書き留められていることは、確かに杵屋富造の言を裏付ける。

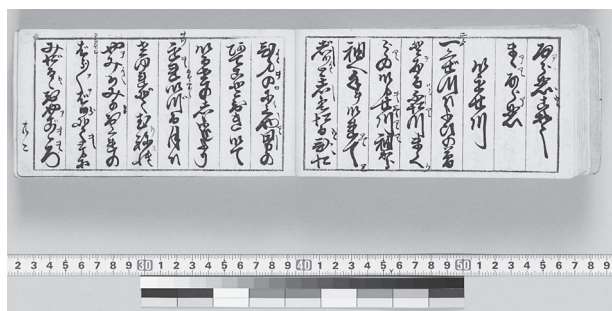
『雑用集哥日カ恵』にはのべ七二七曲が挙がるが、【表2】の「＊」は『上方編』『江戸編』と一致する唄で一三九曲を数える。これは全体の約二割にあたり、現在と共通のレパートリーを確認することができる。一方、それ以外の約八割は『上方編』『江戸編』には見当たらない。ちなみに【表2】には『芝居唄』<sup>(16)</sup>と一致した曲も「○」で示したが、一九三曲で全体の三割程度にとどまる。つまり『雑用集哥日カ恵』には、現在使用されることの少ない（あるいは伝承されていない、忘却された、初めて知られる）唄が数多く収載されているのであり、その内容も上方の土地や風土、習俗に由来するなど、豊穣な唄の蓄積がかつての上方の黒御簾にあったことが具にわかるものとなっている。なお、唄の一部に近代を感じさせるものも見えるが、<sup>(17)</sup> 亀寿が

いつ頃この『雑用集哥日力恵』を分類整理し書き留めたのか、確かな年代のわかる手がかりは残されていない。

幕末から明治初期にかけて上方で活躍した三味線方初代中井猪三郎（一八八五）旧蔵のキツカケ帳（附帳）の末尾に、同様の手控えがあることが知られている（未見）<sup>(18)</sup>。黒御簾の囃子方はこうした手控えを各人整理していたのかもしれない。今後、猪三郎の手控えとの比較検討から、明治初期まで遡り得る芝居唄を特定できる可能性もある。

### 『地哥端哥日力恵』

『地哥端哥日力恵』（地歌端歌控）は、黒御簾で使う唄のうち、独吟、地歌箏曲、上方端歌、端唄、流行り唄などを収載する。唄い出しをリスト化したのが【後掲表3】で、全一五九曲ある。基本的に調子の記載はなく、所々口



【図版14】『地哥端哥日力恵』本文（「いもせ川」）

三味線等が施されている（【図版14】）。本書はゆるやかに曲種別となっているが、先の『雑用集哥日力恵』と重複する曲もある（「瀬田のはし」「あだな世界」等）。先に見た『植木屋』に用いられる「常磐の松」（三勝半七）は、本書に詞章を確認できる。かつて町田博三（佳聲）は、大正期の東京の囃子と大阪の囃子の技量を比べて、後者を率直なまでに酷評したが、一方で東京にない地歌や流行歌を応用したレパートリーについては認めざるを得なかった<sup>(19)</sup>。実際に亀寿の『地哥端哥日力恵』の収載曲からも、上方の黒御簾の豊かな地歌や端歌等の伝承が実感される。

さて【表3】のうち、「\*」は『上方編』と一致する唄で二十三曲ある。「夕だち」や「斎藤」は『上方編』では相方として知られる曲だが、本書に唄の歌詞が見られることは興味深い。というのも『上方編』『斎藤相方』の解説に拠れば、中村美秋（一八九〇～一九九二）の唄本には歌詞はあるものの節には覚えがないという<sup>(20)</sup>。中村美秋は戦前戦後の上方黒御簾の唄方の重鎮で、亀寿よりおよそ一世代下るが、少なくともその頃には既にこの「斎藤」という唄の伝承はなかったと思われる。

また『地哥端哥日力恵』に記載されている「くずの葉どく」には、『芦屋道満大内鑑』子別れの場の独吟で用いられる以下の詞章が見える。

するすみの音さへ忍ぶ筆のあと そめてかたみといとゞ子に 今さら  
こゝろひかされて はなれがた  
なき夜の鶴 やけの、きゞすなくねより むすらの宿へかゑる身の  
それはつゆそふ千枝がもとへ  
今は信田のうらみ葛の葉

この独吟の詞章の変遷について検討された配川美加氏は、詞章八種（A）H）を掲げているが、本書の歌詞はその中のH（典拠は早稲田大学演劇博物館所蔵台帳で、明治二十一年（一八八八）九月大阪角劇場と比定）とほぼ同じものとわかる。

このように収載曲と他史料とそれぞれつき合わせてみることで、近代上方歌舞伎の音楽演出の一端が浮かび上がってくるに違いない。

### 『所作日賀恵』

以上二書に対して、『所作日賀恵』（所作控）は、芝居の所作事の歌詞をまとめた枕本である。全二十三曲。上演年や劇場、役者名が付されることもあり、一一（二）で検討した唄本と重なる曲が多い。【表4】「※」の十二曲は



そのことを示している。歌詞はもちろん、所々にある口三味線、三味線のツボなどの書き込みも（一）の唄本に準じて施されており、おそらく本書は、唄本から書き写したものを含む所作事用の手控えと考えられる。また逆に、本書の補記から（二）の唄本の詳細が判明することもある。

一例を挙げると、『表1―25』にある唄本「戻り橋所作事」（戻り橋）は『所作日賀恵』補記より巽糸子の所作事であったことが窺われる（図版15）。巽糸子（一八八〇―一九二〇）は、ミナミの大和屋で修業した後、神戸八千代座専属の芝居茶屋を営み女興行師として戦前戦後の劇界に通じていた巽テル（一八六一―一九四六）の養女に入り、明治三十年代より道頓堀浪花座や東京市村座等にも出演した女優だった。<sup>(22)</sup> 舞踊に秀でていたらしい。唄本によればこの時の「戻り橋」は、竹本と長唄が掛け合いで勤めたようだ。このほか、花井お梅（一八六三―一九一六）の「保名狂乱」も『所作日賀恵』に見られる（上演年月不明）。亀寿が巽糸子、花井お梅などの地方を勤めていたことは興味深い。

また、『所作日賀恵』の「桐一葉・末広舞」は明治三十七年（一九〇四）

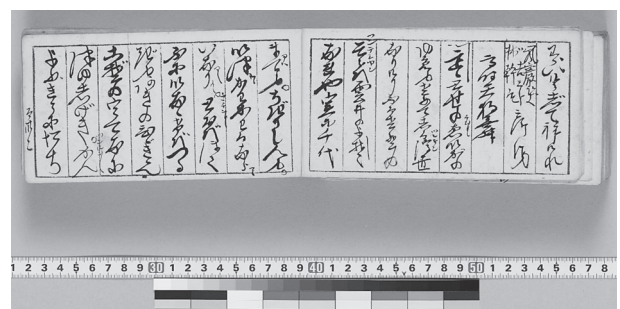


【図版15】上・中：「戻り橋所作事」唄本表紙・本文／下：『所作日賀恵』本文（「戻り橋」）

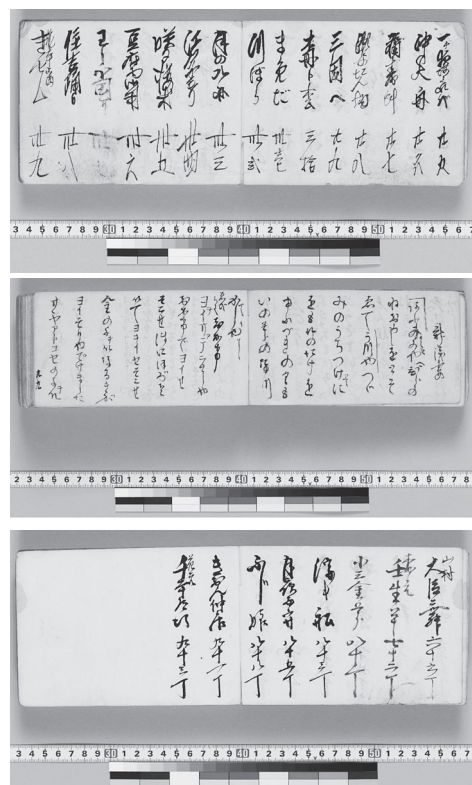
五月大阪角座で三代目片岡我当（十一代目片岡仁左衛門）の淀君・女馬士・片桐且元、実川延二郎（二代目実川延若）の石川伊豆守・秀次の亡霊・大蔵の局、嵐徳三郎の太閤秀吉実は石田三成、奴実は佐々成政によって上演された時のものである。<sup>(23)</sup> 坪内逍遙『桐一葉』の初演は二か月前の三月東京座で、五代目中村芝翫（五代目中村歌右衛門）らによって演じられており、この時に且元役で出ていた片岡我当が大阪にて再演した長唄が『所作日賀恵』におさめられていることになる。詞章内容から、「桐一葉」は二幕目吉野山夜桜の場と畜生塚怨霊の場、「末広舞」は五幕目長廊下乳人自害の場で使われたものと判断される。さらに、『所作日賀恵』収載の「高時天狗舞」は唄本【表1―14】の「北條九代高時天狗舞所作事」と同一で、明治四十一年（一九〇八）二月京都歌舞伎座で実川延二郎が高時を演じた時のものである（図版3、図版16）。『京都日出新聞』（二月二十六日）によれば、九代目市川團十郎のそれとは全く別ものとの触れ込みだった。<sup>(24)</sup> 『所作日賀恵』は、新歌舞伎や活歴等、明治期東京の大芝居の上方再演の内容を確認することでもきる貴重な史料ということになる。

#### 『糸のしらべ』『吾妻しらべ』『舞地調』

最後に、主に舞地として用いられたと考えられる三書をまとめてみておく（表5―7）。この三書が「主に舞地として用いられた」と考えた根拠は、曲名に角書きのように流派名や舞手の名前が記されているためである（図



【図版16】『所作日賀恵』本文（「高時天狗舞」）



【図版 17】上：『糸のしらべ』目次／中：『吾妻しらべ』本文／下：『舞地調』目次

版17】。例えば『糸のしらべ』では「花本こま」（「させん」）、『吾妻しらべ』では「山村政」（「田家煙」「手踊り」）、「ゑびらく」（「おかけ」「てふやれく」）、「陸平様山村様」（「手踊り」）、「山駒様」（「舟乗」）、「花本」（「大めん」）、「杵のぶ」（「新年梅」「さみだれ」）、「山村」（「花ノ旅」「しんぼく」）、「舞地調」では「本田中つぐ様」（「二人玉川」）、「梅元」（「壬生平」）等が見える。前掲の「流祖を中心とした山村流略系譜」と照合すると、山村まさ（山村登久門弟）、山村らく（通称鰍らく、五代目市川鰍十郎妻）、そして山村流から分派した花本流であると推測され、「陸平様」は新舞踊で一時代を築いた煤茂都陸平とわかる。また、「くるわ五郎」（『舞地調』）では「此間山村てつなし」と抜き差しを書き込んでいる場合もある。このような徴証から、亀寿は劇場での活動の他に山村流、煤茂都流、花本流等、大阪の上方舞の地方を勤めていた可能性が高い。一方、花街との関わりは当該史料からは見えてこない。

ところで『糸のしらべ』『吾妻しらべ』という書名からは、近世中期以降に刊行された詞章本が想起される。『糸のしらべ』は地歌の詞章本で、寛延

四年（一七五一）から文政十三年（一八三〇）まで増補改訂を重ねた。『吾妻しらべ』は大坂の舞地用に編集されたもので、弘化四年（一八四七）から文久元年（一八六一）まで出版された。これら版本と亀寿の『糸のしらべ』『吾妻しらべ』の収載曲は一致せず、亀寿の方は分類自体も地歌、上方端歌、歌舞伎所作事由来の曲が雑多に並んでいる印象があるが、亀寿が舞地の枕本の書名をつける際に、流布していた既刊本の存在が念頭にあった可能性も否定できないように思われる。

## 二、本史料からわかること―阪東亀寿の事績とコレクションの位置づけ―

冒頭で述べたように、亀寿の事績は番付史料からはほとんど辿ることができない。一方で、亀寿旧蔵史料六十一点からは、断片的ながら亀寿の事績および上方劇界が浮かび上がってくる。重複を恐れず、ここで改めてまとめながら、本コレクションの位置づけを確認しておきたい。

### （一）活動期間、場所、人脈、レパートリー

阪東亀寿は近代上方歌舞伎の長唄唄方で、主に黒御簾の唄方であったと考えられる。『雑用集哥日カ恵 劇場用』と『地哥端哥日カ恵』と称される枕本は近代上方の芝居唄の分類と体系を把握できる内容で、その豊富な唄のレパートリーと几帳面な整理姿勢に黒御簾の唄方としての矜持が見え隠れする。本史料群に見る活動期間は、明治三十一年十一月から大正九年までの二十二年間で、浪花座、角座、南座、京都歌舞伎座、夷谷座等、大阪や京都の大芝居中心に、神戸大黒座への巡業や大阪第二芦辺倶楽部等の女芝居にも参加している。京都や神戸の上演時の唄本も比較的多いことから、本拠地は大阪だが、地方での公演時に黒御簾の唄方として出向き、ついでに所作事の地方も勤めていたのではないかと推測される。いずれにせよ、唄本や『所作日賀恵』に見られるように所作事においても、当時上方長唄唄方の第一人

者であつた阪東小三郎のワキを勤める実力を有し、初代市川右團次、初代中村鴈治郎、2代目実川延若等大立者の舞台を支えていたことが知られる。ただし、本史料群から見られる活動期間二十二年間に対する唄本の点数としては少なく、普段は黒御簾のみに出勤することの方が多かったのかもしれない。加えて、岩井琴女、巽糸子、花井お梅ら女芝居の所作事にも出ていたことは当時の劇界の様子を具に伝える。

一方で、劇場外での活動、すなわち座敷や演奏会等の舞地としても演奏に携わっていた。これを裏付ける史料が枕本『糸のしらべ』『吾妻しらべ』『舞地調』で、蝦らく事山村らく、煤茂都陸平ほか大阪の上方舞の各流派名や人物名が書き込まれていた。亀寿旧蔵史料から見えてくる人脈のネットワークは、上方舞にも広がりを見せている。

こうした活動範囲の広さゆえに、亀寿の唄のレパートリーは一人の演奏家のそれとしては極めて豊かなものとなった。芝居唄のみならず、所作事、舞地用の曲まで質量ともに多岐にわたっている。またそのジャンルも、長唄、地歌、上方端歌、竹本（義太夫節）、常磐津節、清元節、端唄、流行り唄等を含む。一唄方の旧蔵史料からは、これまで指摘されてきたものの、具体的に見えてこなかったリアルな近代上方の囃子方の実像が浮かび上がってくる。

## （二）本コレクションの位置づけ

さて、本史料群は近代上方の囃子方旧蔵コレクションにおいてどのような史料的位置づけにあるだろうか。近代上方の囃子方旧蔵史料には、ほかにも初代中井猪三郎（一八八五）旧蔵附帳（個人蔵）<sup>(25)</sup>、小川弥三郎（一八七八～一九四四）旧蔵附帳（国立劇場蔵）<sup>(26)</sup>、杵屋富造（一九〇二～七七）旧蔵附帳（国立劇場蔵）、中村美秋（一八九〇～一九九二）旧蔵史料（日本俳優協会蔵）、杵屋胡金吾（一九二二～二〇〇九）旧蔵史料（一部架蔵）等がある。中井猪三郎と杵屋富造は三味線方（附師）、小川弥三郎は鳴物、中村美秋と

杵屋胡金吾は唄方である。活動時期を世代順に並べると、おおそ明治前期の猪三郎、明治中期から大正期の弥三郎、昭和期の富造・美秋、戦後の胡金吾となる。亀寿コレクションは、時期的には弥三郎とほぼ重なってくる。他方、唄方の系譜を考えた場合、美秋や胡金吾のコレクションに先行する。すなわち、今後はこうした上方囃子方旧蔵史料との比較検討が、本史料の特徴および位置づけをより明確にするに違いない。また、本史料は唄方のコレクションであつたため、曲の調弦、三味線の手付、鳴物等は極めて断片的な記述しかないが、猪三郎や富造の旧蔵史料と考証することでより音楽面の理解が深まるだろう。さらに、基本的に他者が見ることを想定していない本史料には、今のところ難読箇所も多く、仮に読めても内容が不明という箇所も少なくない。<sup>(27)</sup>こうした限界を乗り越えるには、やはり他史料との照合が不可欠で、そうして初めて解決できることや、すでに述べてきたことについても修正の必要が出てくるだろう。現時点では本史料の紹介に止まっているが、より深く内容を理解してゆくためにも、近代上方囃子方のコレクション把握が喫緊の課題と言える。

## むすびにかえて

以上、長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について一瞥してきた。第二章において本稿のまとめは終えているので繰り返さないが、本史料を十分に活用した研究の先に、近代上方歌舞伎の音楽演出も立ち現れて来るに違いない。今後も引き続き検討を重ねるとともに、本史料群の公開に向けても方策を考えてゆきたい。

（付記）本稿は二〇一七年二月に東洋音楽学会東日本支部第九十四回定例研究会で行った発表に基づき、内容を再構成したものである。なお調査執筆に際しては、JASPS科研費14J02941および20K20677の助



成を受けた。

- 1 注 この興行にはほかに阪東卯之助、玉村富五郎などの唄方が見える(国立劇場近代歌舞伎年表編集室編『近代歌舞伎年表』大阪篇第六卷、八木書店、一九九一年、六二五頁)。
  - 2 阪東姓の囃子方は戦前戦後にかけての上方歌舞伎ではよく見かける長唄姓で、幕末から明治期の阪東小三郎(唄)、阪東定次郎(三味線、初代阪東徳三郎(三味線)、大正期以降の二代目阪東徳三郎(唄)などが活躍した。
  - 3 「坂東小三郎」の事典項目(秋葉芳美執筆)参照(日本人名大事典(新撰大人名辞典)第五卷、平凡社、一九七九年(覆刻版)、二一〇頁)。
  - 4 例外が【表1-53】の「日本俗謡集」で、表紙見返し、序(一才)、「元禄猛者順礼」(二ウハ才)は阪東源次郎の筆跡と考えられる。
  - 5 「同計略花吉野山」は、寛政六年(一七九四)八月十六日より大坂中の芝居で初代鈴木萬里(一八八一六)が唄ったことでも知られ、渥美清太郎編『邦楽舞踊辞典』(富山房、一九五六年)の「女夫狐」に「また大阪でも、よく義太夫と長唄の掛合でこの踊をやる」と解説されているように、近世後期以来の上方の伝承が窺われる。
  - 6 「歌舞音曲」第拾號、歌舞音曲会、一九〇八年一月、七〇頁。
  - 7 「爛熟・庵頹期(寛政・慶應)概説」(守隨憲治、秋葉芳美共編『歌舞伎図説』解説篇、一九三一年、一三二頁)。
  - 8 例外が【表1-18】「新曲墨塗女」(明治四十年(一九〇七)初演)で、唄本表紙に亀寿の署名がなく、通例の書式と異なっている。「亥の二月狂言」を手がかりに考証すると、明治四十四年(一九一一)二月京都明治座で片岡我童らによる上演が該当するのだが、この時、三代目常磐津松尾太夫は咽喉を痛めて一時休演していたらしい(『近代歌舞伎年表』京都篇第五卷、四四八～四四九頁)。
  - 9 例えば、大正二年(一九一三)四月十五日～五月五日芦辺俱樂部で九女八の弁慶、琴女の富樫、九女八養女の市川菊子の義経による「勸進帳」が上演されており、長唄は東京から三代目松永和楓を呼んでいる(『近代歌舞伎年表』大阪篇第五卷、五三一頁)。
  - 10 【表1-22】「みちとせ道行 忍逢春雪解」も第二芦辺俱樂部で上演された唄本である。あるいは女芝居であったかもしれない。
  - 11 秋葉芳美「続、山村流雑話」(流祖を中心とした山村流略系譜)、『上方』第一三七号、上方郷土研究会、一九四二年五月、三二頁)参照。
  - 12 杵屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』上方編、『歌舞伎音楽集成』刊行会、一九八〇年。
  - 13 『義臣伝説切講釈』(渥美清太郎編『日本戯曲全集』第十五卷、春陽堂、一九二八年、五〇八～五二五頁)。
  - 14 杵屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』江戸編、『歌舞伎音楽集成』刊行会、一九七六年。
  - 15 『江戸編』、一九五～一九六頁。
- ここでは替歌もそれぞれ一曲と数えており、また重複も散見される。厳密な曲数の検

- 16 証は他日を期したい。
- 17 郡司正勝稿・浅原恒男編著『芝居唄―歌舞伎黒御簾音楽歌詞集成―』、文化資源社、二〇二四年。
- 18 例えば「みの部」には以下のような唄が収載される。「御代は文明一陽に 開化がおすきでじやんぎりしやつぽん きぐんかゑいこの教師さん おいひらける御代の松丸ケおさまる日本人 なんとしよか君と僕 おひげをなぜくそくはつひやいっけんしよ」。
- 19 景山正隆「歌舞伎音楽の研究―国文学の視点―」、新典社、一九九二年、二三〇～二三四頁(中井猪三郎のキツカケ帳)。
- 20 「而して最近に於いては鴈治郎一座だけである。東京の囃子に比べて比較にならぬ程質の低い人をわざ／＼八人余りも引率して東京の真中に乗込み「大阪の芝居は大阪の人でなきアどうもならへん」と納まつて居るのは寧ろ鴈治郎其の人の氣質が現はれて居て面白い所である。」「しかし京大阪の囃子が江戸の囃子の出来ない地唄流行歌の類を巧みに塩梅して応用しつゝ、あるのなら三味線や歌は如何に巧くとも江戸の囃子は指を叩へて引込まねばならぬ。」(町田博三「中村鴈治郎と大阪囃子」、『演芸画報』、演芸画報社、一九一九年四月、八一頁)。
- 21 「上方編」、五二頁。
- 22 配川美加「『芦屋道満大内鑑』子別れの場の独吟曲」(『演劇研究センター紀要』早稲田大学21世紀COEプログラム〈演劇の総合的研究と演劇学の確立〉第五卷、二〇〇五年一月)。
- 23 巽糸子の事績については、以下を参照。山本喜市郎『女優総まくり』、光洋社書店、大正五年(一九一六)。巽慶子『女お仕打ち一代記―神戸のお家はん巽テル』、沖積舎、二〇〇七年。
- 24 『近代歌舞伎年表』大阪篇第四卷、一八一～一八二頁。
- 25 『近代歌舞伎年表』京都篇第五卷、一〇一～一〇三頁。
- 26 注18参照。
- 27 本史料については以下の拙稿参照。『国立劇場蔵小川弥三郎旧蔵史料について―近代人形浄瑠璃囃子方の附帳―』(『研究紀要』第五十七集、二〇二三年三月、三二五～三二四(一～十二)頁)。「国立劇場蔵小川弥三郎旧蔵史料翻刻(抄)」(『研究紀要』第五十八集、二〇二四年三月、三七四～三八四(一～十二)頁)。
- 28 一例を挙げると、歌い分けを示すと考えられる「ゾ」「ト」「タ」「マ」などの唄本の書き込みが、誰を指しているのか等も不明である。

【表 1】阪東亀寿旧蔵史料リスト（全体）

| 仮<br>番<br>号 | 表 紙   | 奥付、<br>裏表紙   | 形態（※…紙<br>縫り紐の輪<br>あり） | 寸法<br>（タテ×<br>ヨコ、<br>cm） | 丁数          | 本文への主な<br>書き込み   | 上演<br>年月日<br>座（唄<br>本）       | 『近代歌舞伎年表』（上演年月日、<br>座、主な役者）   | 典拠<br>（『近代<br>歌舞伎<br>年表』）    | 備考   |
|-------------|---|--------------|------------------------|--------------------------|-------------|--|------------------------------|---|------------------------------|--|
| 1           | 明治三拾六年三月吉日<br>妹背山道行<br>寿 阪東亀寿   | 千秋万歳<br>楽    | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 24.5 ×<br>16.8           | 7           | 「歌」「小」「キ」<br>「二人」「皆」<br>「△」「○」、「立<br>入」、口三味線                     | 明治<br>36/03                  | 明治 36/03/08 ～<br>（大阪）角座<br>（切狂言） 妹背山婦女庭訓<br>つゞき三満来<br>中の巻 三輪の里道行の場<br>市川右之助 中村政次郎 市川<br>米十郎 | 大阪篇<br>第4巻                   | 【表2】「所<br>作日カ恵」<br>に「妹背道<br>行」                         |
| 2           | 大切 吉野山所作事<br>市川右團治 市川右之助 市川市<br>蔵<br>明治三十六年四月廿八日初日 道<br>頓堀浪花座ニ於テ<br>寿 阪東亀寿<br>長唄 阪東小三郎 全 阪東亀寿<br>全 阪東仁三郎 三味線 長谷川<br>徳治郎 全 阪東駒三郎 全 熊<br>村米三郎 鳴もの 笛 小川源治<br>阪東直治郎 小川新二郎 | 千秋万歳<br>楽大入叶 | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 24.6 ×<br>17.0           | 7           | 「小」「キ」<br>「上」、赤鉛筆<br>書き、口三味<br>線                                 | 明治<br>36/04<br>道頓堀<br>浪花座    | 明治 36/04/29 ～ 05/28<br>（大阪）浪花座<br>（切狂言） 同計略花吉野山 吉<br>野山正行閑居の場<br>市川右団治 市川右之助 市川<br>市蔵       | 大阪篇<br>第4巻                   | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「吉<br>野山」                       |
| 3           | 当ル明治三十七年十二月顔見世狂<br>言 京都南座<br>中むら鷹治郎一座<br>積恋雪関の扉<br>寿 長唄 坂東亀寿  | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 25.0 ×<br>17.0           | 12          | 「キ」「皆」<br>「上」、「カン」、<br>口三味線、ツ<br>ボ、「ヲトシ」、<br>「どろへ」               | 明治<br>37/12<br>京都南<br>座      | 明治 37/12/02 ～ 16<br>（京都）南座<br>（切狂言） 積恋雪関扉所作事<br>嵐吉三郎 中村鷹次郎 中村玉<br>七<br>竹本連中 長唄はやし連中         | 京都篇<br>第4巻                   |  |
| 4           | 当ル明治三十八年二月一日初日<br>神戸大黒座<br>隅田川統徳所作事<br>市川右團治<br>寿 長唄 阪東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴         | 24.0 ×<br>16.2           | 10<br>（+ 1） | 「上」  | 明治<br>38/02/01<br>神戸大<br>黒座  | —   | —                            | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「隅<br>田川」（市川<br>右 團 次 所<br>作）   |
| 5           | 当ル明治三十八年二月 神戸大黒<br>座<br>吉野山所作事<br>寿 長唄 阪東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 24.2 ×<br>16.8           | 7           | 「上」「ナシ」<br>「ツレ」、「琴<br>歌」、「がく」、<br>「からす」、「す<br>り金」、「キチ<br>ヨ」、口三味線 | 明治<br>38/02<br>神戸大<br>黒座     | —   | —                            |  |
| 6           | 当ル明治三十八年三月 大黒座<br>梅暦ふんごぶし所作事<br>寿 長唄 阪東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 24.2 ×<br>16.7           | 7           | 「此よりな<br>し」、口三味線   | 明治<br>38/03<br>大黒座           | —   | —                            |  |
| 7           | 当ル明治三十八年三月 大黒座<br>操り三番叟引拔三人奴さいの踊り<br>寿 長唄 阪東亀寿  | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴         | 24.2 ×<br>16.5           | 10          | 「皆」、口三味<br>線   | 明治<br>38/03<br>大黒座           | —   | —                            | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」「操三番<br>叟」「三人<br>奴」（市川右<br>團次所作） |
| 8           | 当ル明治三十八年五月 西京歌舞<br>伎座<br>忠臣蔵七段返し所作事<br>寿 長唄 坂東亀寿  | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴         | 23.8 ×<br>16.4           | 9           | 「上」、「シラ<br>ベ」、「時 太<br>鼓」、「早舞」、<br>「風音」、「クル<br>イ 大小」、口<br>三味線     | 明治<br>38/05<br>西京歌<br>舞伎座    | 明治 38/05/15 ～ 28<br>（京都）歌舞伎座<br>（切狂言） 所作事忠臣蔵誉凱歌<br>七段返し<br>中村鷹次郎 中村政次郎 嵐吉<br>三郎 中村福助        | 京都篇<br>第4巻                   | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「忠<br>臣蔵七段返<br>し」（中村鷹<br>治郎一座）  |
| 9           | 当ル明治三十八年六月一日 西京<br>歌舞伎座<br>中むら鷹治郎一座 大津画所作事<br>寿 長唄 阪東亀寿   | —            | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 23.9 ×<br>16.4           | 11          | 「ツ、ミ哥」、<br>口三味線  | 明治<br>38/06/01<br>西京歌<br>舞伎座 | 明治 38/06/01 ～ 13<br>（京都）歌舞伎座<br>大喜利 大津画所作事<br>中村鷹治郎 嵐吉三郎 中村福<br>助                           | 京都篇<br>第4巻                   | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「大<br>津画」（中村<br>鷹 治 郎 所<br>作）   |
| 10          | 当ル明治三十八年七月<br>所作事元禄盆踊り<br>寿 長唄 阪東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 25.0 ×<br>17.2           | 13          | 「詞あり」「カ<br>ン」「△」、口<br>三味線  | 明治<br>38/07                  | 明治 38/07/01 ～ 18<br>（京都）明治座<br>（大切）所作事盆踊都風流 高安<br>月郊氏作<br>市川右團治 嵐巖笑                         | 京都篇<br>第4巻、<br>辻 番 付<br>（演博） |  |
| 11          | 当ル明治三十八年十二月顔見世<br>京都歌舞伎座<br>門けいせい所作事<br>市川右團治 中村鷹治郎 中村福<br>助一座<br>寿 長唄 坂東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 24.1 ×<br>16.5           | 10          | 「小」「キ」、「ス<br>リ上」、口三味<br>線、見消                                     | 明治<br>38/12<br>京都歌<br>舞伎座    | 明治 38/11/30 ～ 12/15<br>（京都）歌舞伎座<br>大切所作事三幅対土佐絵遊<br>市川右團治 中村政治郎 市川<br>右之助 嵐巖笑<br>竹本連中 長唄連中   | 京都篇<br>第4巻、<br>辻 番 付<br>（演博） | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「門<br>けいせい」<br>（市川右團<br>次所作）    |
| 12          | 明治四拾年六月<br>磯の松羽衣所作事<br>嵐三五郎一流<br>寿 長唄 坂東亀寿  | 千秋万歳<br>大々叶  | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※       | 23.7 ×<br>16.4           | 6           | 「ウタイ」「浄」<br>「鳴物つなく」<br>「ガク」「どろ<br>へ」「カツ<br>コ」、口三味線               | 明治<br>40/06                  | —   | —                            | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「羽<br>衣」（嵐三五<br>郎所作）            |

|    |  |                     |                  |                |    |   |   |  |               |   |
|----|--|---------------------|------------------|----------------|----|---|---|--|---------------|---|
| 13 | 当ル明治四拾一年一月 京都歌舞伎座<br>油とりうつば猿<br>寿 長唄 坂東亀寿                    | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.1 ×<br>17.1 | 12 | 「キ」「ソ」「ト」<br>「マ」、「此間小<br>猿ヲたく迄引<br>ハル」、口三味<br>線 | 明治<br>41/01<br>京都歌<br>舞伎座               | 明治 41/01/01 ～ 22<br>(京都) 歌舞伎座<br>切 当歳申一調 所作事<br>実川延二郎 嵐巖笑 嵐吉三郎<br>林幹尾  | 京都 篇<br>第 5 卷 | 【仮番号 57】<br>「所作日カ<br>恵」に「油<br>とりうつば<br>猿」(嵐巖笑<br>々 吉三郎<br>林 幹 尾 所<br>作) |
| 14 | 当ル明治四拾壹年二月 京都歌舞伎座<br>北條九代高時天狗舞所作事<br>河内家<br>寿 長唄 坂東亀寿        | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.0 ×<br>16.2 | 7  | 口三味線  | 明治<br>41/02<br>京都歌<br>舞伎座               | 明治 41/01/31 ～ 2/22<br>(京都) 歌舞伎座<br>史劇妖霊星 高時天狗舞之場<br>実川延二郎 嵐徳三郎   | 京都 篇<br>第 5 卷 | 【仮番号 57】<br>「所作日カ<br>恵」に「高<br>時天狗舞」<br>(実川延二<br>郎所作)                    |
| 15 | 当ル明治四拾壹年十二月 顔見世<br>京都南座<br>からくりまとふ所作事<br>寿 長唄 坂東亀寿           | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.5 ×<br>17.0 | 12 | 「上」「△」<br>「皆」、口三味<br>線                          | 明治<br>41/12<br>京都南<br>座                 | 明治 41/12/01 ～ 16<br>(京都) 南座<br>(切狂言) 滑稽所作事 当りの<br>中村梅玉 中村福助 市川右之<br>助 市川箱登羅 嵐巖笑 中村<br>扇治郎 市川右團治  | 京都 篇<br>第 5 卷 |   |
| 16 | 当ル明治四十二年一月 京都夷谷座<br>縁むすび所作事<br>寿 長唄 坂東亀寿                     | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.0 ×<br>16.3 | 10 | 「キ」「ト」<br>「△」、「ツ、ミ<br>哥」、「ウ タ<br>イ」、口三味<br>線、見消 | 明治<br>42/01<br>京都夷<br>谷座                | 明治 42/01/01 ～ 22<br>(京都) 夷谷座<br>所作事 初春出雲賑<br>中村福之助 浅尾関十郎   | 京都 篇<br>第 5 卷 |   |
| 17 | 当ル明治四拾貳年十二月 京都夷谷座<br>忠臣蔵八段目道行所作事 廓文章<br>吉田屋之場<br>寿 長唄 坂東亀寿   | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 25.0 ×<br>17.2 | 9  | 「キ」「上」「ど<br>く」、「カン」<br>「チラン」、口<br>三味線           | 明治<br>42/12<br>京都夷<br>谷座                | 明治 42/11/28 ～ 12/20<br>(京都) 夷谷座<br>第一番目 仮名手本忠臣蔵<br>四十七調<br>大喜利 廓文章 吉田屋の場<br>中村福之助 嵐和三郎 片岡愛<br>之助   | 京都 篇<br>第 5 卷 |   |
| 18 | 当ル亥の二月狂言<br>新曲墨塗女<br>中満来 常磐津                                 | 千秋万歳<br>大々叶<br>於明治座 | 半紙本、二穴<br>紙縫り綴   | 25.0 ×<br>17.4 | 10 | 「カン」「上<br>下」、「太郎」<br>「花の」、口三<br>味線              | —                                       | 明治 44/02/1 ～ 22<br>(京都) 明治座<br>中幕 新曲墨塗<br>片岡我童 嵐徳三郎 実川延三<br>郎<br>常磐津松尾太夫 常磐津千歳太<br>夫 常磐津相生太夫 三味線<br>岸沢仲助 上調子 岸沢寿久  | 京都 篇<br>第 6 卷 | 東京風。他<br>筆カ。本人<br>の 署 名 な<br>し。<br>松 尾 太 夫、<br>咽喉を痛め<br>て 一 時 休<br>演。   |
| 19 | 当ル明治四十四年四月 歌舞伎座<br>忠臣蔵<br>嵐橋三郎 嵐巖笑 尾上多見之助<br>一座<br>寿 長唄 坂東亀寿 | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.9 ×<br>17.3 | 6  | 「哥」「ウタイ」  | 明治<br>44/04<br>歌舞伎<br>座                 | 明治 44/04/02 ～ 25<br>(京都) 歌舞伎座<br>(前狂言) 仮名手本忠臣蔵 大<br>序より九段目迄<br>嵐橋三郎 嵐巖笑 尾上多見之<br>助   | 京都 篇<br>第 5 卷 | 黒御簾の下<br>座唄   |
| 20 | 当ル大正二年一月 浪花座<br>大黒天引拔宝恵駕所作事<br>寿 長唄 坂東亀寿                     | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴   | 24.1 ×<br>16.6 | 6  | 口三味線、見<br>消                                     | 大正<br>02/01<br>浪花座                      | 大正 02/01/01 ～ 23<br>(大阪) 浪花座<br>(大喜利) 福の神所作事 一幕<br>市川斎入 嵐巖笑 中村福助<br>(長唄) 阪東辰之助 浜村藤次<br>郎 (三味線) 長谷川徳翁 中<br>村小浅 阪東駒三郎 (笛) 阪<br>東福三郎 小川芳松 (太鼓)<br>小川政次郎 (小鼓) 阪東岩次<br>郎 (大鼓) 阪東久次郎 | 大阪 篇<br>第 5 卷 |   |
| 21 | 当ル大正二年六月下旬 九条第貳<br>芦辺倶楽部<br>鶴亀引拔紀尾井獅々<br>寿 長唄 坂東亀寿           | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.1 ×<br>16.5 | 12 | 「タ」「キ」「ト」<br>「×」                                | 大正<br>02/06 下<br>旬<br>九条第<br>貳芦辺<br>倶楽部 | 大正 02/06/21 ～<br>(大阪) 第貳芦辺倶楽部<br>(邦舞) 鶴亀引拔勢獅々<br>岩井琴女一座  | 大阪 篇<br>第 5 卷 |   |
| 22 | 当ル大正貳年八月中旬 九条第貳<br>芦辺倶楽部<br>みちとせ道行 忍逢春雪解<br>寿 長唄 坂東亀寿        | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 23.9 ×<br>16.3 | 6  | 口三味線、ツ<br>ボ                                     | 大正<br>02/08 中<br>旬<br>九条第<br>貳芦辺<br>倶楽部 | —  | —             |   |
| 23 | 当ル大正九年五月下旬 歌舞伎座<br>大蔵猿舞<br>寿 長唄 坂東亀寿                         | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.2 ×<br>16.7 | 6  | 「キ」「ト」、口<br>三味線、見消                              | 大正<br>09/05 下<br>旬<br>歌舞伎<br>座          | 大正 09/05/20 ～<br>(大阪) 九条歌舞伎座<br>(一番目) 鬼一法眼三略巻 菊畑<br>より大蔵卿物語まで<br>片岡長太夫 尾上多見丸   | 大阪 篇<br>第 6 卷 |   |
| 24 | 大正九年十二月下旬 八千代座<br>夕ぎり所作<br>寿 長唄 坂東亀寿                         | 千秋万歳<br>大々叶         | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴、※ | 24.5 ×<br>16.7 | 6  | 口三味線  | 大正<br>09/12 下<br>旬<br>八千代<br>座          | 大正 09/12/20 ～<br>(大阪) 松島八千代座<br>(切狂言) 雪月花 下の巻 廓<br>文章 吉田屋の場<br>片岡門童 実川延丈 市川右田<br>作 中村香太郎   | 大阪 篇<br>第 6 卷 |   |



|    |  |                    |                |                |            |  |   |   |   |   |
|----|--|--------------------|----------------|----------------|------------|--|---|---|---|---|
| 25 | 当ル明治□年七月<br>戻り橋所作事<br>寿 長唄 坂東亀寿                    | 千秋万歳<br>大々叶        | 半紙本、四穴<br>紙縫り綴 | 24.8 ×<br>17.2 | 9          | 「大薩摩」「ウ」<br>「キ」「ヨ」<br>「△」、「上」、<br>「カン」、「ツ」、<br>「ミ哥」、口三味<br>線 | — | — | — | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「戻<br>り橋」(巽糸<br>子所作) |
| 26 | お染久松 七変化所作事<br>坂東亀寿                                | —                  | 半紙本            | 24.0 ×<br>16.5 | 13         | 「立入」「上る<br>り」  | — | — | — | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「お<br>染久松七<br>役」あり   |
| 27 | 喜せん  | 千秋万歳<br>楽大々大<br>入叶 | 半紙本、二穴<br>紙縫り綴 | 24.2 ×<br>16.7 | 13         | 「つゞみ哥」<br>「カン」「キ」<br>「ト」「フ」、朱                                | — | — | — |   |
| 28 | 文学上人瀧の場 不動大薩摩<br>坂東亀寿                              | —                  | 半紙本            | 23.7 ×<br>16.2 | 3          | 朱  | — | — | — |   |
| 29 | もみじがり  | —                  | 半紙本            | 25.0 ×<br>17.3 | 6          | 「ウタイ」  | — | — | — | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」にも「紅<br>葉狩」あり         |
| 30 | 越後じ、 阪亀  | —                  | 半紙本            | 24.1 ×<br>16.4 | 5          |  | — |   |   |   |
| 31 | 老まつ  | —                  | 半紙本            | 24.2 ×<br>16.6 | 6          |  | — |   |   |   |
| 32 | お光狂乱 神おろし  | —                  | 半紙本            | 24.4 ×<br>16.7 | 7          |  | — |   |   |   |
| 33 | 鯉売   | —                  | 半紙本            | 24.8 ×<br>17.0 | 4          |  | — |   |   |   |
| 34 | かづき面   | —                  | 半紙本            | 25.0 ×<br>16.8 | 4          |  | — |   |   |   |
| 35 | 勸進帳 坂東亀寿   | —                  | 半紙本            | 24.0 ×<br>16.6 | 12         | (三味線の手)<br>「合方」  | — |   |   |   |
| 36 | 子持山姥 坂東亀寿  | —                  | 半紙本            | 24.5 ×<br>16.8 | 5<br>(+ 2) |  | — |   |   | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」にも「子<br>持山姥」あり        |
| 37 | 猩々   | 坂東亀寿               | 半紙本            | 24.0 ×<br>16.4 | 3          |  | — |   |   |   |
| 38 | 末広がりがり   | —                  | 半紙本            | 23.9 ×<br>16.4 | 5          |  | — |   |   |   |
| 39 | 千本道行 坂東亀寿  | —                  | 半紙本            | 24.2 ×<br>16.5 | 12         | 「五十式」～<br>「六十一」  | — |   |   |   |
| 40 | 玉うさぎ   | —                  | 半紙本            | 24.9 ×<br>17.0 | 6          | 「△」、朱  | — |   |   |   |
| 41 | 積恋雪関屋 上下   | 坂東亀寿               | 半紙本            | 24.8 ×<br>17.6 | 23         | 「上」「哥」   | — |   |   |   |
| 42 | 供やつこ 坂亀  | —                  | 半紙本            | 24.8 ×<br>17.0 | 5          |  | — |   |   | 【仮番号57】<br>「所作日カ<br>恵」に「友<br>奴」あり           |
| 43 | 手縫物語りの段  | —                  | 半紙本            | 23.1 ×<br>16.6 | 9          |  | — |   |   |   |
| 44 | 福山   | —                  | 半紙本            | 24.9 ×<br>16.9 | 6          |  | — |   |   |   |
| 45 | ましら猿 阪亀  | —                  | 半紙本            | 24.2 ×<br>16.7 | 6          |  | — |   |   |   |
| 46 | 娘道成寺 阪亀  | —                  | 半紙本            | 24.1 ×<br>16.4 | 9          |  | — |   |   |   |
| 47 | 桃太郎  | —                  | 半紙本            | 24.3 ×<br>16.5 | 4          |  | — |   |   |   |
| 48 | 山姥 坂東亀寿  | —                  | 半紙本            | 24.1 ×<br>16.4 | 5          |  | — |   |   |   |
| 49 | 勇神楽 一丁 清元権八 五丁<br>雨乞小町 九丁 町娘 十五丁<br>娘小町 十二丁 仕丁 十七丁 | 坂東亀寿               | 半紙本            | 25.0 ×<br>17.2 | 19         | 「入事」   | — |   |   |   |
| 50 | 五斗 八重桐 仕丁  | 坂東亀寿               | 半紙本            | 24.3 ×<br>16.4 | 22         | 「△」「詞」   | — |   |   |   |
| 51 | 乗合万歳 花かむろ 坂東亀寿                                     | —                  | 半紙本            | 25.2 ×<br>16.7 | 12         |  | — |   |   |   |
| 52 | 吉原雀 馬方三吉 宇治川 名取<br>草 坂東亀寿                          | —                  | 半紙本            | 24.6 ×<br>17.1 | 19         | 「△」「ツゞミ<br>哥」、朱  | — |   |   |   |

|    |  |             |                           |                |                          |   |                    |  |   |
|----|--|-------------|---------------------------|----------------|--------------------------|---|--------------------|--|---|
| 53 | 日本俗謡集（明治参拾有三年庚子<br>第三月吉祥）<br>（元禄猛者順礼 常盤御前 石動<br>丸 将門 戻駕） | 本主 阪<br>東亀寿 | 厚紙表紙、半<br>紙本、四穴糸<br>綴     | 24.1 ×<br>16.3 | 38                       | 「壹」～「七」、<br>「二十」～「廿<br>一」、「四十七」<br>～「五十一」、<br>「廿二」～「廿<br>九」、「三十式」<br>～「四十三」 | 明治<br>33/03        |  | 「明治参拾<br>有三年庚子<br>第三月吉<br>祥」（表紙見<br>返し、他筆）<br>「から哥や<br>やまと言の<br>葉こきませ<br>て 三すし<br>の緒よりし<br>らへてしか<br>な 阪東源<br>次郎輝正」<br>（一丁オ、他<br>筆）。<br>目次有。 |
| 54 | 明治三拾一年十一月吉日<br>うつば猿 亀寿<br>北新地 山村つね様                      | —           | 半紙本                       | 25.1 ×<br>17.1 | 7<br>(+ 1)               | 「△」「○」  | 明治<br>31/11<br>北新地 |  |   |
| 55 | 中村流 一人り忠信 坂東亀寿   | —           | 半紙本                       | 24.4 ×<br>16.3 | 15                       | 「八」～「十五」  | —                  |  |   |
| 56 | 雑用哥集日カ恵 劇場用  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙、原<br>稿用紙（二<br>折）に罫線有 | 11.0 ×<br>17.3 | 200<br>（白丁<br>29）        |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表2】  |
| 57 | 所作日賀恵  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙、帳<br>面に罫線有           | 9.0 ×<br>17.9  | 154<br>（白丁<br>1）         |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表3】参<br>照  |
| 58 | 地哥端哥日カ恵  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙、帳<br>面に罫線有           | 9.0 ×<br>18.0  | 118<br>（白丁<br>13）        |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表4】  |
| 59 | 糸のしらべ  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙                      | 12.0 ×<br>16.5 | 98                       |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表5】  |
| 60 | 吾妻しらべ  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙                      | 8.8 ×<br>17.5  | 180<br>（白丁<br>1）         |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表6】  |
| 61 | 舞地調  | 坂東亀寿        | 厚紙表紙                      | 11.7 ×<br>16.8 | 100<br>（白丁<br>2、紙<br>片2） |   |                    |  | 目次有。詳<br>細【表7】  |

【表2】「雑用哥集日力恵」内題および唄い出し一覧（七二七曲）【目次省略】

| 〔かん哥（甲唄） タ々哥（只唄）〕 |              |      |                    |
|-------------------|--------------|------|--------------------|
| 一                 | 松は千年に ○424   | 一    | 桜ちる *○335          |
| 一                 | 千代はたのしや      | 一    | 青柳の                |
| 一                 | 花のらんじやに ○424 | 一    | 梅か枝に               |
| 一                 | 立る錦木         | 一    | 久市の                |
| 一                 | 滝はしぜんと *○424 | 一    | 立田川                |
| 一                 | 谷の鶯          | 在郷   |                    |
| 一                 | しがのさゝ浪       | 一    | 所在へは               |
| 一                 | 磯の松風         | 一    | わしが思ふよに            |
| 一                 | 風にまかせて       | 一    | 瀬戸のな *○398         |
| 一                 | 須磨せきもり       | 一    | 小倉しき島 *○160        |
| 一                 | 渡りくらべて       | 一    | となり柿の木に、十七八が *○483 |
| 一                 | 月は清水に        | 一    | 秋の間垣に *○13         |
| 一                 | 裏（よい）の妻戸に    | 一    | あいは瀬にすむ *江○52      |
| 一                 | しづがふせやに      | 一    | 麦つんで小麦つんで *○676    |
| 一                 | つゆの玉の尾       | 一    | 坂こへて               |
| 一                 | 雪の戸山の        | 一    | 茶がら木の枝に *○445      |
| 一                 | あしとよしとは      | 一    | かまた木の枝に            |
| 一                 | みちはいへつじ      | 一    | 山で小柴お *○719        |
| 一                 | 袖のしがらみ       | 一    | 山で切ル木は             |
| 一                 | 露の玉の尾        | 一    | こぼれ松葉 *○300        |
| 一                 | あまのたくなる      | 一    | つるへと *○470         |
| 一                 | 思ふ心は         | 一    | 今年しや世がよて *○295     |
| 一                 | ふじは紫 ○424    | 一    | あれお見や              |
| 〔くり上〕             |              | 一    | 千草色々 *○441         |
| 一                 | ほどは雲井に *○637 | 一    | 宇治は茶所、茶はゑんどころ      |
| 一                 | ぎりといいとに      | 一    | しほらしや *○353        |
| 一                 | 雪の妻戸に        | 一    | ゆかしきや              |
| 一                 | 一人り明石の       | 一    | かわゆらし              |
| 一                 | 宇治の橋寺        | 一    | 竹にすおくむ *江○426      |
| 一                 | さしもしらじな      | 一    | 野梅山梅咲染し            |
| 琴哥                |              | 一    | すいつけ田葉             |
| 一                 | 常磐なる 松の緑も    | 一    | 年なじさまは *○479       |
| 一                 | 春風に 花おいといし   | 一    | しよが袖の              |
| 一                 | 琴の音に *○298   | 一    | わしが主さん             |
| 一                 | 玉だれの内 ○437   | 一    | 春の鶯ナア              |
|                   |              | 一    | 雨にうたれてナア           |
|                   |              | 一    | 大和ナア *○720         |
|                   |              | 一    | 水の山々               |
|                   |              | 一    | 水に一ト筆かきつばた         |
|                   |              | 一    | さめがいの *○347        |
|                   |              | 一    | かへ哥 柏原かへしの         |
|                   |              | 一    | □り舟水に              |
|                   |              | 一    | 伏見里 *○617          |
|                   |              | 一    | 春風に                |
|                   |              | 一    | 早（こい）              |
|                   |              | 一    | 里はかやぶき *○339       |
|                   |              | 一    | いで山吹 *○339         |
|                   |              | 一    | 七段よめおやの在郷          |
|                   |              | 一    | 春はひとしお             |
|                   |              | 一    | 春はからさき             |
|                   |              | 一    | 佐渡と越後は *○336       |
|                   |              | 一    | 七里遊ふて              |
|                   |              | 一    | 田葉鴉                |
|                   |              | 一    | 須磨の浦まで *○389       |
|                   |              | 一    | 宇治は茶処              |
|                   |              | 一    | 吃又ざいこ              |
|                   |              | 一    | うきよわたりの            |
|                   |              | 在郷   |                    |
|                   |              | 一    | 今年しや世がよて *○295     |
|                   |              | 一    | 御崎おどりは *○661       |
|                   |              | 一    | 八幡山崎 *○730         |
|                   |              | 茶屋場哥 |                    |
|                   |              | 一    | わしは此町の             |
|                   |              | 一    | ぼたんしやくやく           |
|                   |              | 一    | かしにきたとて            |
|                   |              | 一    | 阿波の鳴戸から            |
|                   |              | 一    | 花に遊ば、 *○653        |
|                   |              | 一    | 三筋町の               |
|                   |              | 一    | 土手の丁ちん *江○481      |
|                   |              | 一    | しやんしよめが            |
|                   |              | 一    | よいの白さき *○747       |
|                   |              | 一    | 二ツ桜に               |



ちらし

一 元より葉の酒なれば ○ 697

一 今迄こゝに

一 後日に一トたび

一 鶴の羽重

一 春海はとふ

一 君が代のく 一 山河草木 ○ 349

神楽大拍子

一 十二銅から

一 四社にあり升 \* 江○ 358

一 神楽ばやしや住吉の \* 202

一 ざおんばやしや二けん茶や

一 神楽ばやしや生玉の \* 201

一 隅田川

一 向ふ島には

一 今年しや世がよふて \* 296

一 十ヲの年から

一 五町には

一 待乳山から

一 柳橋には

一 花に遊ぶや

一 島田金谷は

一 行もかゑるも

一 蛙なくさへ

一 いなり祭りの \* 江○ 88

いの部

一 一陽にきつれて

一 池水 \* 63

かへ哥

一 なびかんせ

一 いっしかの

一 一陽に春やきにけり \* 78

一 いつもあおく

一 いざゝらば \* 64

一 色どる木々の

一 色の岡崎きや(かへ哥はいの部の前にあり) \* 93

一 色が黒とて

一 色が白イとて

一 いたこ出島 \* 72

一 いなりまいりの

一 壱分小判に

一 今の芸には

一 いやととびのくのふヲ \* 89

雪月花かへ哥

一 いざゝらば雪見にゆかんせ

一 いざゝらば雪見につれる

一 いおゝなる

一 いきかかいくわか

一 陽かへ哥

一 紅葉ばのいろに

一 色ト酒トハ

一 いでの山吹 ○ 84

一 いざゝらば \* 64

一 いこかもどろか

ろの部

一 花ヲ見よ

はの部

一 初恋の人目はづかし

一 花見時 そらはれ渡る \*

一 花の咲り 咲りは花の

かへ哥

一 春は花見 きつれてつれて

一 春風に なびく柳のそよ〜と \* 576

一 花は平野に \* 568

一 春かあなたへ

かへ哥

一 雪はまもなく真白く

此替哥はなの部の二ツ目にあり

一 花の都は扱て哥処 \* 566

一 □しき月に

一 はでなはつびの三つ鶴や

一 花が咲く小金の花が ○ 568

一 花の弥生は

一 羽根をやすむるナア

一 花のとききよ島 \* 江○ 562

一 春の永日に \* 580

一 羽織きせても上下きても

一 羽織きせかけもしこちの人

一 春のはじめや

一 花の都の

成吉しらべ

一 花の夜も

一 花も嵐に

松竹梅

一 花の浪花の浪花の花の

一 初春や見渡より

一 春風にむすんでとけて

一 萩はたゝさへ物さびしきに

一 萩の下葉に

一 花の咲りと

一 初春の寿きに

かへ哥

一 夏になりや

かへ哥

一 秋になりや

かへ哥

一 冬になりや

一 はなの璃寛

一 花の浪花の

一 花は辰みか

一 春雨ならで朧夜の \* 576

一 花が咲ても

一 博多女郎衆はナア

一 葉桜やいきなおかたの

一 花やかにうちつれきたる

にの部

一 日本目出度き \* 333

一 西と東へたてわけられて

一 にぎわしききくや此花

ほの部

一 宝来にきかばや

一 本田通りすりや

一 本田く〜本田さん

一 つれてみやがれナア

への部〔空欄〕  
との部

- 一 床の柱にもたれてかゝる \*○476
- 一 とのゝかえりおまんまどから見れば ○484
- 一 とろりゝ \*○490
- 一 大坂はなれて \*○164
- 一 ござれ登るやくらがり峠
- 一 奈良の都の名所をかぞへ
- 一 せめて一夜は帯とけ地藏
- 一 雨はふらねどあかばねあがり
- 一 御ゑん御さらば
- 一 天の岩戸へ燈明あげて
- 一 はしりゝて石原越へて
- 一 泊りじやないか泊らんせ
- 一 トンカラゝゝゝゝ
- 一 とのさへとのさところから
- 一 といちとられて
- 一 とけて□しや
- 一 時計片手にひざたて直し
- 一 どうぞかなへて \*江○473
- ちの部
- 一 千草も冬がれて \*江○443
- 一 千代のためしの ○450
- 一 長やれゝ
- 一 ちよやれゝ
- 一 長なんの
- 一 ちよあいの三毛猫が
- 一 ちぐさむすびの
- 一 長筆の
- 一 兒子様のゝ
- 一 姫様のゝ
- りの部〔空欄〕
- ぬの部
- 一 ぬれ染しに
- るの部〔空欄〕
- おの部
- 一 大官人の
- 一 磐形人丸ざくら

一 お咲揃へて花やかに \*○166  
かへ哥

- 一 ひらくかんろの
- 一 咲そろふ
- 一 おまい鉄びん
- 一 大津八町逢坂越へて \*江○149
- 一 近江八景
- 一 大津名物追分きせる
- 一 大津石橋の
- 一 親じやもどつたか
- 一 おまいさんはナア \*○180
- 一 おふせゝ下の関迄も
- 一 おさん女郎衆は
- 一 おくりましょかや \*江○162
- 一 沖で鯛つる鯉つるあわび \*江○150
- 一 おまへしんだら
- 一 おばゝ小□すりや
- 一 冬はこたつで
- 一 おいてばかりし
- 一 思ふほど
- 一 おりてゆく花の盛りヲ
- 一 扇蝶なたねなの花
- 一 おもいださんせ
- 一 男なりせし初ざくら
- 一 沖おこへたる
- 一 おひいさんが
- 一 おいとこそうだよ ○143
- 一 男達じやの
- 一 沖のくらしいのに白帆が見ゆる
- 一 沖のくらしいのに□まとれゝ
- 一 おふて嬉しき わかれのつらさ
- 一 おぼろ夜の
- 一 お千代ゝと
- 一 おまい青梅わしや青松葉
- かへ哥
- 一 おまい正宗わしやさび刀
- かへ哥

一 せつしや此町で  
かへ哥

わの部

- 一 いかにわたしが
- 一 おいてばかりし
- 一 おきの浪間ヲ
- 私が世もつきじ
- 一 わたしやいやいな
- 一 わたしや八幡の
- 一 わが恋は
- 一 わしは野に咲くあさみの花よ
- 一 わしは野に咲くすみれの花よ
- 一 わしは野に咲くあざみの花よ
- 一 若なつむとて ○763
- 一 わしが在所の
- かの部
- 一 かまくら見たか ○219
- 一 川ふねにのせておゝせを \*○227
- 一 川崎女郎衆が
- 一 蛙がなくさへ
- 一 かいの地藏さんはナア
- 一 鎌倉つるしよふ
- 一 石つはめは
- 金比羅舟ゝかへ哥
- 一 かんてらつけゝてんぶらあげゝ
- 一 かいなゝゝゝ
- 一 づらさうきみのかへ哥
- 一 かげの□とさいぶしの
- 一 かゑる駕やに
- 一 かわ竹の雲の上まで
- 一 かくれみの
- 一 かくれみのかくれ傘 \*○203
- 一 かみなりごろゝ
- 一 川はゝ
- 一 海上はるかに \*江○194
- 一 川舟にのせておゝせを \*○227
- 一 かどの小哥を
- 一 かねててくだと ○217

## よの部

- 一 宵の白鷺やみよのからす \*○747
- 一 宵のくぜつお車クルマにのせて
- 一 よそでとかんす
- 一 よるべ定ぬ浮き草じやとて
- 一 よるとさわると
- 一 よいはさわきでまぎれていても
- 一 世の中は古いたとへのあすか川
- 一 よそで咲とはあたにくらしい
- 一 よにもとゝろくいかづちの

## たの部

- 一 玉だれの内やゆかしき \*○437
- 一 たまさかあへば夢やみづ
- 一 だましやんせ又だまされし
- 一 竹になりたやゝ七九竹 \*江○427
- 一 竹に雀は中よいけれど

## 松竹梅

- 一 たち渡るかすみをそらのしるべにい

## れの部

- 一 雁とつばめ \*江○210

## その部

- 一 その手で深みへ ○407
- 一 それとめだゝぬなりふりも \*江○688
- 一 そなたおもへば七里が灘を \*江○451
- 一 空に一とこゑアレ時鳥 ○412

## つの部

- 一 月待とそのやくそくの ○461
- 一 月にうつりししおり戸を
- 一 月はまんまる \*○460
- 一 うちの首尾して \*○460-1
- 一 月はさゆれど心はさへぬ ○459
- 一 月はさへても心はさへぬ
- 一 つくゝと物にまぎれぬ
- 一 ついてくりやるな八まんかねを \*○451
- 一 つくばねの姿すゝしきなつゝろも

## ねの部〔空欄〕

## なの部

- 一 名とりの里にひく三味の

## 花の都はの替歌

- 一 浪花名所 \*○510
- 一 夏の夕ぐれに ○503
- 一 夏は卯の花山時鳥
- 一 なれし吾妻の花なれや \*
- 一 長い〱両国ばしや
- 一 何をくよゝ \*○511
- 一 名古や名物みやしげ大根 ○500
- 一 なつかしや見先に
- 一 切れ与三と見染
- 一 七草のほころび染る
- 一 かへ哥
- 一 見渡せば沖のけしきも
- 一 夏は卯の花水に浮き草 \*○504
- 一 浪花新町都で島ばら

## らの部〔空欄〕

- 一 向ふ通りやる熊のどふ者の
- 一 紫のゆかりの色やかきつばた

## むの部

- 一 うつろふ秋の色見へて
- 一 うつし心の花の春 ○115
- 一 うたるゝわたしやいとねど
- 一 馬が戻つたか与作さんが見へぬ
- 一 富士のしら雪朝日とける
- 一 何をくよゝ〱川端やなぎ \*○511
- 一 梅が咲くかさくらはまだなきか \*江○128
- 一 あられ玉ちる時雨はまだなきか
- 一 うすい峠のごんげんさんは ○109
- 一 梅が咲には奥山に
- 一 うからゝ羅生門を通過
- 一 梅は北野の天神様の
- 一 うきよいといし

## うの部

- 一 のふ〱山が見へ候
- 一 のめばかんと皆人が

## おの部〔空欄〕

## くの部

- 一 くよゝと水の流れと \*○262
- 一 ぐちもいゆらは
- 一 口で事つけあてにはならぬ
- 一 くらふするのを ○2060

## やの部

- 一 やアしめろやれ \*○700
- 一 やもしげる豊芦原の
- 一 山すぎて橋を恋じに
- 一 やよいの花見は上野か
- 一 ヤアヤンレひけ〱
- 一 ヤア秋の中
- 一 山で切る木はたくさん
- 一 山で色すりや木の根が
- 一 闇の夜に吉原ばかりが \*江○724
- 一 春霞み立るやいづく \*江○724
- 一 つもる夜はかさなる風え
- 一 山は〱山おゝけれど \*○721
- 一 山寺のかねつくしもくが
- 一 山形の庄やの嫁なぜに
- 一 八重咲や一ト重心の \*○704
- 一 山の神じやの
- 一 やばな事ばし
- 一 やみ雲にめぐるつゞみの
- 一 弥生花月さいたりな
- 一 たおるかたげて
- 一 ヤア面白の賑ひて
- 一 柳桜や春〱と \*○709
- 一 やよおりらし

## まの部

- 一 松といふもじは ○648
- 一 松の太夫のうちかけは \*江○652
- 一 まねく小花についまよい
- 一 間垣のすがゞき
- 一 松のかげには
- 一 月がないたか \*○453
- 一 まきへかゞやくいんろうの
- 一 まちなはれ〱



けの部

- 一 実に豊かなる日の本の
- 一 げん正みたさに \*○268
- 一 げいこ朝もどりお
- 一 けんけらけん

ふの部

- 一 ふりこめ
- 一 船じやあぶない
- 一 ふけてぬる夜のねやの戸に \*江○612
- 一 筆もおよばぬ糸の島景色
- 一 ふちとなるその源は \*○621
- 一 ふさぎやはだから
- 一 ふけてこがれてまつ夜のつらや
- 一 ふつと見染しア、おみなへし
- 一 ふけて二人りが打とけて
- 一 富士の山から三保の松ばら
- 一 舟は出てゆくほ上げて \*江○625
- 一 伏見京の町
- 一 文月の星のあふ夜を \*○627
- 一 そよとすゝしき夕ぐれに \*○627

この部

- 一 こちのおもはく \*江○294
- 一 九重の都の空を立いで、
- 一 恋すてふ花のまに \*○271
- 一 月と雪朝日色どる
- 一 隅田川水に加茂さん
- 一 恋の山口名も高き
- 一 こちの町の夜番どんは
- 一 春
- 一 恋にあらわれ
- 一 夏
- 一 夏の月かけ
- 一 秋
- 一 心嬉しき
- 一 冬
- 一 雪の妻戸に
- 一 心関やに蝶が笑ふ
- 一 恋の千葉文ナア \*○141、278

こんど長崎からかわつた物を ○305

- 一 心づてのナア ○284
- 一 子供たらしの
- 一 金比羅舟々 ○307
- 一 心すぐなる \*○282
- 一 今年しやなんだか

えの部

- 一 エ、エ、浅草で
- 一 遠州浜松 \*上江○139
- 一 エ、エ、よい道すじをまつ
- 一 エ、エ、新町橋を
- 一 えんまさん

ての部

- 一 手挑に土手を

あの部

- 一 明け渡る
- 一 秋の宮島 \*○14
- 一 秋の七草 \*江○11
- 一 ありやとこせい
- 一 秋の茂中や
- 一 秋の野に
- 一 あだな色ある \*○29
- 一 仇な色すりや
- 一 あわぬ夜は
- 一 あごでしらせて
- 一 あら玉の
- 一 あやめ咲とは
- 一 秋になりや
- 一 油くと浪花町中売りあるく \*○41
- 一 天津風
- 一 あ、とよしとはナア
- 一 天の川ほしのちぎりも \*○45
- 一 姉さんほんじよかへ
- 一 姉は狐で妹は小猫
- 一 赤い物にとりては \*○8
- 一 あけわたる雪のけしきも
- 一 さの部
- 一 さへいづる月にやさしき

かへ哥

- 一 さへ渡る月になさけの
- 一 咲そろふ
- 一 咲そろふ仇なさくらや
- 一 里に名も高尾の紅葉
- 一 酒はけんびし
- 一 扱てもにぎわし
- 一 三尺さつて
- 一 桜花たがいの国の
- 一 松は松の木 \*○344
- 一 さくよりちるまでも \*○319
- 一 しんぼへ高上るは
- 一 さんげく六こんしよ \*江○350

きの部

- 一 桐が間垣 \*○256
- 一 君お待つ夜は ○248
- 一 きりくすそなたの足は
- 一 君とねよふか \*江○236
- 一 きせる片手に
- 一 けふはあすかと
- 一 菊のしほりの
- 一 氣にいらぬ風とあろふに
- 一 ざおんにつゝいて
- 一 京から下る御正指様
- 一 岸の柳についまねかれて
- 一 君に扇のナア ○238
- 一 松竹梅
- 一 きみかよのにこらでたへぬ
- 一 ゆの部
- 一 夢はふざんの ○744
- 一 雪の戸山に
- 一 雪となる
- 一 夕べ横町で
- 一 雪見酒今朝もしつぱり
- 一 雪はまもなく
- 一 雪はしんく \*江○740
- 一 雪はふるく
- 一 行もかゑるも

一 雪見酒とて  
めの部

此花

一 □しき顔まだつゝむ  
みの部

一 水にひと筆かきつばた  
一 水の出花と二人りが中は  
一 見渡せばあかねさす  
一 道に四筋の鉄道すらりと  
一 見やしやんせ今宵の月と

一 御代は文明一様に

\* ○ 665

一 見たやあいたや山ほとゝぎす  
一 見たやあいたやあの君様へ

一 やぶにそだちしあの鶯も  
一 いつもあお／＼松の木さへも

一 □かゑりに六道の辻で  
一 三島沼津やはらふじも

○ 662

しの部

一 繻子のはかまの（此かへ哥せの部にあり）  
一 下にはむくの日ぐらや

\* ○ 362

一 しとふ心はナア \* 江○ 361  
一 恨み顔にて \* 江○ 361

一 忍ぶもじづり ○ 369  
一 白いはだへ

一 東雲の別れにしつかと  
一 新実いやではなけれども

一 島田金谷はなんじやいな  
一 島田金谷はナア

一 四国へんろの若後家さんは  
一 信州エ信野の善光寺様エ

一 しやか様が目なし鳥に  
一 じやんじやか／＼

○ 374

一 しらめしほりお  
一 地廻にかたの手拭

一 忍ぶなり身は  
一 時雨□浅路が原の

一 しめつからみつア、  
一 忍ぶならやみの夜は

○ 367

一 白浪のこゝによするや ○ 384  
一 しぐれして待夜は

一 四季の□会の事初め  
一 しのぶ逢夜の

一 白たへの富士の高根に ○ 385  
一 おたやんおさかさいいて

一 天狗さんをさかさいいて  
一 しげきあふては

ゑの部〔空欄〕

ひの部

一 ひるかへす  
一 引三味せんはきおん町

一 ひらけ重し御代げしき  
一 東山のナア／＼お月きや

\* ○ 589  
一 東山のナア／＼上から見れば  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 ひとつとサア  
一 ひとつとサア

一 すいかぶすいか \* 江○ 386  
一 すいかぶすいか

一 すいかぶすいか  
一 すいかぶすいか

一 住吉のすましもちでも  
一 ずぼんぼへ \* ○ 464

一 おきの浪間おともよびかわす  
一 まちなはれ／＼

二上り新内

一 今朝もろふかで  
一 花も嵐にちらさるゝ

一 さりし女房のかたみとて  
一 わるどめせづとも

一 孝と愛との荒浪に  
一 坂に車おさづとも

追分

一 三日うらんで  
一 わかれの風だよ

そゝり

一 八つ山下の茶屋女 ○ 708  
一 むねの雲きり

一 雪おり笹や \* ○ 737  
一 清盛さんは

一 花はちりても月日をまたば  
一 追分

一 沖のまに／＼  
一 かさお手を持ち \* 江○ 207

一 おいてくりやるナ  
一 西で追分東で関所 ○ 519

一 義理と人情は命のかなめ  
一 むねの雲きり

野歌

一 秋が来るかや鹿さへなくに \* ○ 9  
一 さいてしほれて

一 きそで掛橋太田の渡し  
一 せけん広ふに

乳もらい歌

一 そも／＼是は宇多の天皇  
一 引に引ぬか

一 竹に品よく  
一 見附られたる  
さやあて

一 花の雨ぬれにくるわの ○ 5027

一 白茶袴の

一 風に柳の

一 元は浮気で

一 かほにほそりか

大倉於京舞

一 雲の上なき

シギン

一 一けんけんい

一 へいきすいたに

一 国をさつて

一 丈夫三十

一 □をめで

一 天下のたいけん

一 国土まつたくさだまる

一 ころもかんにいたる

一 人ふるれば人をきる

ウタイ

一 りうじよがたちもふ

一 竜神さる沢の池の

一 さしもにたけき

一 さながらこゝに

一 とく／＼たてや

一 実にも安楽世界より

一 今お初めの旅衣／＼

一 所は高砂の屋上の松も

一 四海浪しづかにて

一 げにあおぎてや

一 ありがたのよろこぶや

シギン

一 しよしんしきりに

ウタイ

植木や

一 山寺の春の夕ぐれ ○ 4077

ッ

一 されども此人は ○ 4036

一 ちぎりしもこよいかぎりにて

植木やどく

一 あだなこの世に ○ 2009

一 あきくれて ○ 2004

一 つゝいすじの ○ 2004

乳もらい哥

一 そも／＼是は宇多の天皇

一 引か引ぬか

一 竹にしなよく

一 見附られたる

さやあて

一 花の雨ぬれにくるわの ○ 5027

一 白茶袴の

一 風に柳の

一 元は浮気で

一 かほにほそりか

〔以下曲名のみ掲出〕

げこすべらして \* ○ 265

よとのとまり

操三番天てらす

地藏経 \* ○ 245

黒谷わさん

つな上

菅生丞

渡辺の綱

五段かゑし

つぼら

大津画与三郎

げほらちよこ／＼

雨の夜

十日戎替哥

おんら

だい／＼かぐら

権ぎせる

夜ふけて

初春や

瀬田の橋から

同かへ哥

わらずや

雲にかけはし

花に蝶々

越後の国

ちよろけん

登り夜舟 ○ 536

七福神

舟のり

露とすゝき

秋くさ

まめだ

おきてみつ

月の八日

豆腐御用

住吉踊り

おちやべ

あいたさに

一陽に \* ○ 78

梅のつばみ

いけん曾我紋尽し

善玉悪玉三社まつり

扇蝶

橋づくし \* ○ 506

柱立万才

八景 春かあなたの

あめうり

はつしぐれ

木津川

春雨メ ○ 578

御所車 \* 江 ○ 214

かどまつ

夜ざくら \* 江 ○ 748

野田のふじ

水の出花

一トつくずや

川竹 \* 江 ○ 2051



つがいはなれぬ  
御所の御庭 ○ 291  
ひげ奴  
松の二葉  
曾我宇治茶かへ哥  
松になりたや  
仇な世界に \* ○ 31  
鶴の声  
すりばち  
黒かみ ○ 2061  
なの葉 \* ○ 2051  
あさとて  
きゝす ○ 2052  
ゆき \* ○ 2129  
政月  
扇づくし  
越の戸  
ほうらい

ゆかりの月 ○ 2030  
万ざい  
袖ごうろ ○ 2134  
袖の露 ○ 2079  
滝づくし  
綱手車  
夕かほ  
ゑんのつな ○ 2135  
わん久  
通ふ神 ○ 95  
袖頭巾  
かくれんぼ  
おほこきく  
ひなぶり \* 江 ○ 275  
羽織妻  
水の出花  
あしかり  
竹のゑん

おけとり \* ○ 410  
大仏  
やしま  
菊の露 \* ○ 2117  
かなわ \* ○ 2192  
加賀の千代

〈凡例〉〔表2〕〔表3〕  
・□・【】は難読、不詳。  
・（ ）は目次表記、補記。  
・〔 〕は筆者補記。  
・\*は『歌舞伎音楽集成』（江戸編・上方編）と照合。○は『芝居唄』と照合（数字は当該書の唄番号）。但し、いずれも多少の歌詞の異同あり。  
・目次によって見出しを補記したところがある。

【表3】「地哥端哥日力恵」（一五九曲）〔目次省略〕

天神のどく 忠臣蔵独く お岩どく くずの葉どく あれお見さいナア\* 露の蝶\* きれ尽し あやぎぬ\* どんでん 玉川\* わすれ生姜 ねのび 八重一ト重 葵の上 浮船 淀川 山めぐり 山尽し 四つの袖 夕ぞら いもせ川 よるべ 口きり よおうつせみ 常磐の松\* 立花\* 梅の月 こ、は島原\* 花の旅\* 茶おんど 鳥辺山\* 沖の石 夏ははたる 見たいな こよいあふとのわしが思イ 土手 私もの 秋の夜 宇治茶 かへ哥 忍ふ夜 柳ばし 替うたいざや\* 替哥\* 柳々\* タくれ 桐の雨 ぐち 一トこゑ しょ(が) いなア\* 斉藤\* 一トつ夜着 桜見よとて 替哥 梅にも春 夕だち 一ヶ夜明れば 福寿草 瀬戸のだん畑 三国一 梅と松 替哥 わしが国サ 土手の替哥 春はこづへ四季\* 花のくもり 高砂や 玉川 初春や 瀬田のはし かへ哥 いなづま あだな世界\* 三下り夕立 やりさび 西行 書おくる 今朝のわかれ 思ひこんだる 雪とも さみだれ 萩桔梗 あだな笑顔 竹の春 今朝のあめ\* しんとふけて\* しば玉 首尾ト二人 里おはなれし となり座しき 月花 夜やさむし\* つらさうき身\* かへ哥 しくれて 雪はしんく 香水の 主しさんと おたがいにかへ哥 ふけてこがれて あさゝは\* ねみだれし それと目だ、し むらとして 四季狸キ 雪月花 青柳の 萩の戸お\* こ、もり しかの唐崎 東京四季 うわきどうし うそと誠と 若ふづま まりは柳と(露は小花と) 有馬名所\* 有馬二階から 夜ばいさんえ 金比羅舟々 むらさき めぐる日や 深川 奴さん雨の夜 しんの夜中に 金時が ふけて逢夜 浮草や 風にうらみの つい一トことの ほとゝぎす おくざしき さみたれに 夕ぞらに 八郎兵衛 神おろし させてとる 東のやりさび つかいはなれぬ つれぐ お、て丁しの はみがきかねてより にくらしい 姉さん 夜もふけて 夕ぞら 忍ぶ恋じ まつよいは願□かへ哥 松の縁 朝顔どく おちやめのと 糸のしらべ 東獅々

【表4】「所作日賀恵」（二十五曲）〔目次省略〕

かけ画所作(明治三十六年三月角座 市川右團次 中村福助一座) 妹背道行(明治三十六年三月角座 市川右之助 中村政二郎 一日かわり) ※ お染久松七役(明治三十六年六月浪花座 市川右團次) 桐一葉・末広舞(明治三十七年五月角座 片岡我当一座) 伏見の里(明治三十七年七月天満座 中村芝雀所作) 吉野山(明治三十六年四月浪花座 市川右團次一座 同右之助相勤申候) ※ 六歌仙(嵐三五郎所作) 紅葉狩(中村政治郎所作) 隅田川(市川右團次所作) ※ 操三番叟・操三番叟前※ 三人奴(市川右團次所作) ※ 忠臣蔵七段返し(中村鴈治郎一座) ※ 大津画(中村鴈治郎所作) ※ 四ッ谷怪談夢之場(市川右團次所作) 夜ばい星かよい舟(市川右之助所作) 門けいせい(市川右團次所作) ※ 友奴(片岡我童所作) 羽衣(嵐三五郎所作) ※ 油とりうつば猿(嵐巖笑 同吉三郎 林幹尾所作) ※ 高時天狗舞(実川延二郎所作) ※ 保名狂乱(花井梅所作) 戻り橋(巽糸子所作) ※ 子持山姥

【表5】「糸のしらべ」(七十四曲) 【目次省略】

(地歌) 玉川(本てうし) 夏はほたる 見たいな あめうり こ、もり わしがお  
もい 土手 我もの 秋の夜 宇治茶 しのお夜 柳ばし いざや 柳々 夕ぐれ  
きりの雨 ぐち 一トこゑ しよがいな さい藤 一ト夜着 さくら見よとて 梅  
にも春 一チ夜あへれば 福寿草 沖の大舟 うらのだんばたけ 三国一 梅ト松  
まめだ つばら 月の八日 江戸子もり 咲タさくらの木に 豆腐御用 わしが国  
サ 住吉おどり きせん(花本こま) おちやべ わすれ生姜 あいたさに 土手かへ哥  
曾我 奴胤 明神の けほらちこく 四季 かばちや見よとて 春はこづへ 松  
の葉 四季 千本道行 一やふに 花のくもり 五段かえし 曾我紋づくし 深川  
高砂や くわしん売 雨の夜 宇治茶かへ哥 曾我 十日戎かへ哥 力弥 善玉悪玉 養老  
扇蝶 通舟しゆびと二人 橋づくし きさらぎ 花が咲タラ 松になりたや 羽織妻  
ねのび 八重一重 博多沖から

【表6】「吾妻しらべ」(一二二曲) 【目次省略】

玉川 さしてとる あれお見さいな おんら 千本忠信花道入 けに花なれば ち  
らし たいくかぐら おちやめのと 大神舞 大津ふし 与三郎 藤娘 権きせる 夜  
ふけて 山村政 田家煙 品玉や 山村政 手踊り 里で咲花 初春や あずさ手踊り せた  
のはし つゆの蝶 梅と松 堺住吉 花に蝶に 玉川 松づくし しよる殿 草か  
り いなづま 新浅妻 ぬびらく おかけ ぬびらく てふやれく きれづくし 本田中村つく子  
もり どんでん 長さよ (ちらしうとう川舞) あたのせかい 三下り夕立 花のくも  
り 三ヶ月 たつね行ましよ 越後国 やりさび 西行 草かり童子 茶つみ 朝  
日ノ御旗 合羽奴 松風 あやきぬ ちよろけん さしてとる 大めん(花本)  
こ、は島ばら 陸平様 山村様 手踊り 新吉の 引物尽し 勇男 西ノ宮 なかん平奴 西ノ宮道  
成寺前哥 西ノ宮 道成寺祈り のほり夜舟 五郎ちらし 七福神 本田中村屋 草かり まし  
ら入 やア面白や 江戸土産 三番叟 三作万才 子供遊び 山崎様 舟乗 使イ奴 神  
田奴 書おくる けさのわかれ 思ひこんだる 雪とけ きん時 明ケのからす(梅  
本) 梅本 つゆとす、き 三番叟 共者舞 春駒(中ふく) くらま(中ふく) 新年梅  
(杵のぶ) さみだれ(杵のぶ) 私が思イ 萩桔梗 花ノ旅(山村) しんぼく(山村)  
あだな笑顔 心いき つな上 菅生丞 寅ノ年 茶せん売 三作万才 新高砂 秋  
くさ(東やりさび) 渡辺綱 登り夜舟 あいた見たさに 神おろし おきてみつ  
一ケふじ 道成寺ウタイ 堺住吉 浮舟 十日戎 殿さん 奴さん 姉さん 四社  
に有升 ふし娘 国せんや 寿 梅が栄へ 忍ふ恋じ 玉川 弓の月

【表7】「舞地調」(二十七曲) 【目次省略】

くるわ五郎(此間山村てつなし) お七吉三 八郎兵衛 角兵衛獅々 本田中村つく子 二人  
玉川 大尽舞 葵の上 若菜摘 柱立万才(山村) 汐干狩 名所競 そば(だる  
まそば) こよい 同かへ哥 こ、わ島原 矢倉お七 神田祭 信野 山村けそう文  
山村大臣舞 壬生平(梅元) 小三金五郎 浮船 月夜子守 ふじ娘 きおん中居 千  
本道行